



# 慢性疾患看護専門看護師研究会 20周年記念誌

本研究会は2025年、  
創立20周年を迎えます。

私たちは、  
前に進むだけではなく、  
時には立ち止まったり、  
身を寄せたり、  
振り返ったりしながら、  
これからもそれぞれの場所で  
活動を続けていきます。

## 日時・場所

- 2025年10月12日（日）  
10:00 - 15:00
- 順天堂大学7号館13階  
有山登メモリアルホール

## 主な内容

- リレートーク  
研究会の20年の歩み  
歴代会長たちのことば  
CNS教育の第一人者  
野川道子先生のことば
- 研究会の歴史
- 交流集会
- 昼食交流会

慢性疾患看護専門看護師研究会 20周年記念事業

痛みも 希望も 未来も  
ともにつむぐ



慢性疾患看護専門看護師研究会  
Research Conference By CNS in Chronic Care Nursing

## 目次

1. 20周年記念事業 プログラム .....	1
2. 20周年記念事業の記録.....	2
3. 研究会の歴史 .....	18
1) 研究会について .....	18
2) 歴代会長と役員 .....	19
3) 会員数の推移.....	21
4) 主要事業の実施状況.....	21
(1) 事例検討会 .....	21
(2) 日本慢性看護学会 交流集会 .....	22
(3) スキルアップセミナー.....	24
(4) 研究活動.....	26
(5) ホームページ.....	27
(6) その他.....	28
4. 20周年記念事業 参加者アンケートの結果.....	30

## 1. 20周年記念事業 プログラム



### 20th anniversary 慢性疾患看護専門看護師研究会 Research Conference By CNS in Chronic Care Nursing

痛みも希望も未来も ともにつむぐ

2025年10月12日（日）10:00－15:00  
順天堂大学7号館（A棟）13階 有山登メモリアルホール

#### プログラム

10:00 開会の挨拶  
記念品の紹介

#### 基調講演

慢性疾患看護専門看護師研究会の20年の歩みに寄せて  
今、慢性疾患看護専門看護師に求められていること  
－誕生から近未来へ

北海道医療大学名誉教授 野川道子先生

リレートーク～研究会の20年の歩み 歴代会長に聞く

初代会長 添田百合子さん  
2代会長 東めぐみさん  
3代会長 長谷佳子さん  
4代会長 高山望さん  
5代会長 東めぐみさん  
6代会長 米田昭子さん

昼食・ご歓談 研究会の歴史 映像鑑賞

休憩

交流集会 「CNSがつながる未来を語り合う」  
企画 九州慢性看護実践研究会

15:00 閉会の挨拶

## 2. 20周年記念事業の記録

### 開会の挨拶

#### 第6代 慢性疾患看護専門看護師研究会会長

米田 昭子

本日は、全国からお集まりいただきありがとうございます。今日、この会を開催できて本当に嬉しく思います。というのも、本会が15周年を迎えた際、当時の高山会長が15周年記念事業を企画くださいましたが、COVID-19の流行により開催できなかったという経緯があります。今回の20周年記念事業は、5年前の高山会長の情熱を受け継ぎ、前会長の東会長が委員長として企画委員を集め、メールなどで何度も意見交換を重ねながら、今日を迎えることができました。企画に携わった皆さまも、この日を迎えられてほっとされていることと思います。改めて感謝いたします。

そして、今日は久しぶりに皆さんと対面でお会いできましたこと、嬉しく思います。先ほど講師控室で、初代会長の添田さんとお話する機会がありました。本会立ち上げ当時の辛く苦しい思いが彷彿とされ、今は笑って話せることが、何ていいのだろうと思いました。対面で集まることの良さを改めて実感しています。それでは、これから20周年記念事業を開催いたします。皆さま、どうぞ今日を楽しんでください。

### 基調講演

慢性疾患看護専門看護師研究会の20年の歩みに寄せて今、慢性疾患看護専門看護師に求められていること 誕生から近未来へ

ーチェンジエージェント力についてー

北海道医療大学名誉教授 野川 道子先生

皆さまこんにちは、今日は慢性疾患看護専門看護師研究会20周年ということです。一口に20周年と申しましても、晴れの日も雨の日もあったことかと思ひ、20年間続けられたことに感激しております。CNS関連のこととして、私がこれまで参加していた会議は次のとおりです。

2010.4～2018.3

日本看護協会 CNS 制度委員会委員

2010.4～2015.3

日本看護系大学協議会 CNS 教育課程認定委員会  
(慢性看護)

2011.4～2015.3

日本看護協会 CNS 認定委員会 (慢性疾患看護)

2015.4～2018.3

日本看護系大学協議会 高度実践看護師認定委員会  
(プライマリケア看護)

2015.4～2018.3

日本 NP 教育大学院協会 理事

2015.4～2018.3

日本 NP 学会 監事

本日は、慢性看護の専門家養成の歴史と、慢性疾患専門看護師に求められるチェンジエージェント力についてお話しし、さらに私の教え子の中でCNSの資格をとり、チェンジエージェントとして活動されている4名の活動をご紹介します。

### 慢性看護の専門家養成の歴史

慢性疾患看護専門看護師は、2024年現在、287名となっていました。不在の県が11県あります。青森、秋田、福島、長野、富山、石川、三重、鳥取、島根、宮崎、鹿児島です。ここをなんとか埋めないといけない。CNSがもっと認知されるように、皆さんの活動が届くように、送り込みたいと思いますので、皆さんもご協力をお願いします。

では、慢性看護の専門家養成の歴史についてお話ししてまいります。日本慢性看護学会の設立は、初代理事長の野並葉子先生のもと2006年12月3日に発足しました。発起人は、野並葉子先生(兵庫県立大学)、河口てる子先生(日本赤字看護大学)、数間恵子先生(東京大学)、川村佐和子先生(青森県立保健大学)、土居洋子先生(大阪府立大学)、野川道子(北海道医療大学)です。野並先生がその時おっしゃっていたのは、CNS課程修了生に活躍の場を提供したい、彼らのために学会を創設したいという強い思いをお持ちでした。

学会設立の目的は、①慢性看護の知の体系化、②

慢性看護の研究者の交流支援、③慢性看護に関する政策提言を行うことでした。

その後学会は、第6回学術集会（2013年5月）の時点で、会員数582名に成長しました。当時の第2代理事長 河口てる子先生から「慢性看護の知の体系化」に取り組むことの提案があり、慢性看護あり方検討委員会を組成しています。慢性看護あり方検討会の活動内容は、ワーキンググループを作って、①慢性看護に共通する核となる内容の検討、②慢性看護学の学問領域の検討、③慢性看護学の高度な実践の検討に取り組んできました。

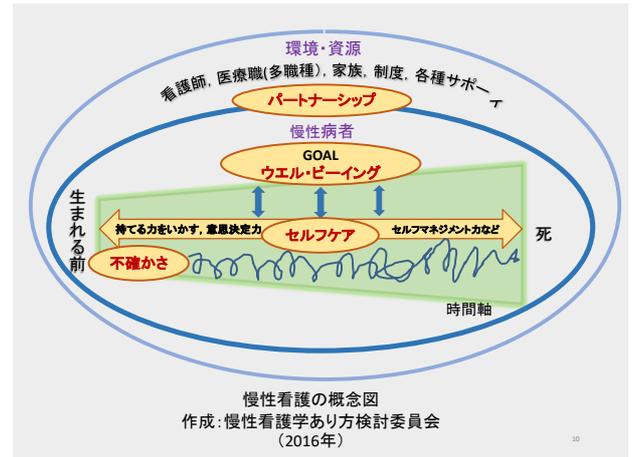
### 「慢性看護学あり方検討委員会」の活動内容

- 「慢性看護学あり方検討委員会」ではワーキンググループを組成、以下の課題に取り組んでいる。
  - 慢性看護に共通する核となる内容の検討
  - 慢性看護学の学問領域の検討
  - 慢性看護学の高度な実践の検討

第8回学術集会  
(2014年)  
交流集会での発表

- 1) 慢性病の定義・特徴・類型
- 2) 慢性看護学研究の歴史の変遷
- 3) テキストからみる慢性看護の範疇(対象, 活用理論, 支援方法)
- 4) 実践からみる慢性看護の知の体系化

また、こちらの慢性看護の概念図は、日本赤十字看護大学の本庄恵子先生と私で煮詰めたものです。人は生まれて亡くなるまで常に健康問題に対峙し、不確かさにずっと揺れながら、持ち堪えて生きているという状態を示しています。でも人は希望を失いません。どんなことがあっても生きていたい。ですから人はゴールをよりよく生きるというウェルビーイングに定めて、セルフケアを発揮して生きていこうとします。図では「パートナーシップ」がその人の人生を取り囲んでいます。慢性病患者は、看護職、医療職、家族など、さまざまな人々からのサポートに恵まれながら、ウェルビーイングを達成しているという概念図です。皆様のご意見がいただけると幸いです。



### 慢性疾患専門看護師に求められるチェンジエージェント力

専門看護師には、実践、相談、調整、倫理調整、教育、研究という6つの役割がありますが、私はこれに加えてチェンジエージェント力が必要だと考えています。先日、女性、初の内閣総理大臣に選出された高市早苗さんがお持ちの、先を見据えて改革していく力、そういう力が専門看護師にも求められています。ここに参加している方はすでに実践されているのだと思いますが、チェンジエージェントとしての専門看護師の役割は次のスライドのとおりです。私は、5番目の持続的な変化の定着を組織文化に根付かせることが特に大切だと考えます。

### チェンジ・エージェントとしての看護師の役割

1. **変化を生み出す推進者**  
よりよい看護やケアの実現に向けて、現状を見つめ直し、改善を促す。
2. **課題の可視化と共有**  
問題を明確にし、多職種・患者・家族と共有する。
3. **協働による変革の実践**  
チームや地域と協働し、変化を共に創り出す。
4. **教育・支援を通じた影響力**  
メンバーの学びと成長を支え、行動変容を導く。
5. **持続的な変化の定着**  
変革を継続的に評価し、組織文化として根づかせる。

### チェンジエージェントとして活躍している修了生

本学の慢性看護 CNS コース修了生のうち、私が把握している21名が活動している場を調べてみると、訪問看護ステーション6名、外来5名となっており、地域に繋がったところで活躍していることがわかります。また病棟3名、医療連携相談部1名、

看護部3名、特定非営利活動法人1名、大学教員2名でした。ここでは、チェンジエージェントとして活躍されている4名の修了生の活動を紹介します。

### ① 能見 真紀子さん

患者さんに寄り添い、患者さんの意向を尊重する看護に熱い思いを持った方です。CNSの資格を取得されて5年目です。CNSはさまざまな能力があるがゆえに、管理部門に誘われがちですね。それが悪いとは思いませんが、CNSはその役割をCNSとして全うして欲しいと思っています。今や看護管理者にはさまざまな研修があり、認定看護管理者などの専門的な資格もあります。看護管理は主に管理資格がある人に任せ協働できたらいいと思います。

能見さんは20年の臨床経験の後、慢性呼吸器疾患の認定看護師の資格を得て、その後北海道医療大学の大学院修士課程を修了、2020年に慢性疾患看護専門看護師の資格を取得しています。活躍している場所は、北海道砂川市立病院、地域の中核病院です。外来看護師長として、看護外来のほか、外来支援ナース、院内横断的活動、呼吸ケアチーム専任看護師、看護部倫理担当などを兼務しています。

彼女の悩みは、専門看護師として直接患者に支援することと、看護師長として看護管理を担うという、2重の役割が課せられていることからのジレンマです。時間に限りがある中でこの多重業務をどう担うかということですが、看護管理者の方とも話し合っていて、整理して、CNSとしてその役割がしっかり果たせるような組織文化を醸成していくことを期待します。

彼女は、活動の成果を振り返って、スタッフと共に患者さんに看護を実践することを通して、自分の可能性もさらに広がっていくのではないかと気づいていました。今後の課題として①看護に専心する、②かかわる全ての人の力を引き出す、③看護実践の可視化に努める、の3つを挙げ、邁進しています。

### ② 野島 弘基さん

野島さんは、へき地でCNS+NPとして働いています。彼のこれまでの経験は循環器外科病院の救急検査室やICUなど主に急性期です。その経験の中から病院に搬送される前に地域で0～3次予防ができないかと考えるようになり大学院に進学、2019年に慢性疾患看護CNSとプライマリケア診療看護師(NP)の資格を取得しました。北海道医療

大学には、CNSコースとNPコースがドッキングしたコースがしばらくありました。カリキュラムは過密で、ハードでしたが、めげずに挑戦していた姿が頼もしく印象的でした。

現在資格を取得されて6年目、北海道浦河町のエマオ訪問看護ステーションというところで活動しています。浦河町には外国人が多いという特徴があるほか、全国から集まった精神疾患患者さんが、べてるの家という共同体を作って、生活を営んでいる地域です。

野島さんのCNSとしての活動経験をご紹介します。主な活動の場は、診療所の外来で二人の医師と診療を行っていますが、訪問看護ステーションの所長さんとしてスタッフナースの調整や相談業務にあたっています。彼はふところが深く、待つ姿勢で、患者さんや医療スタッフの希望を挫かない。スタッフの強みと特性を考え、内省を重ね自律できるようにサポートしています。今後の展望として、伴走者として、利用者さんの「やり切った」につながるかわりの実施と地域住民へのACPの普及を考えています。

### ③ 吉田 貴普さん

彼は、東京慈恵会医科大学付属第三病院で様々な診療科を経験後、本学の慢性疾患看護CNS/Primary Care NPコースに進学、CNSとNPの資格を取得しました。2015年4月からJA北海道厚生連 倶知安厚生病院でCNS及びNPとして3年間活動後、2019年に米国に看護留学をし、2021年9月からDaemen University Adult-Gerontology Primary Care Nurse Practitioner Programに進学、2024年5月からUniversity of Rochester Medicine Noyes HealthでHospitalistとして勤務しています。勤務する病院は、ニューヨークから車で6時間離れたへき地にある40床の病院です。この周囲には他に病院がなく、かなり広い範囲をカバーしなければなりません。活動経験としては、週40時間(10時間×4日)、週3日お休み、たまにExtraでの活動があるということでした。

日本では専門医がそれぞれの専門に沿って入院患者を治療します。しかし、専門医の人数に限られている米国では、医師は必要に応じて治療に参加しますが、多くはHospitalistが担うそうです。Hospitalistには、看護をバックグラウンドに持つ

NP の他、PA (Physician Assistant)がいます。彼の活動しているニューヨーク州では、Hospitalist に医療面接/身体診察、検査 Order、検査の解釈、処方（麻薬含む）、入退院の判断、コンサルテーションが認められており、外来部門では自立して実践することができます。入院病棟では医師の監督下に実践することが多いということでした。保険請求は対医師比で、入院病棟では 80%、外来では 100%請求が可能です。

また彼は病院から、卓越したベッドサイドでの対応と、患者さんへの揺るぎない献身が高く評価され「Boast & Brag Meet of the Week/今週の誇れるニュース」として表彰されています。このような評価は活動のモチベーションになります。日本でも、このように褒め合う文化が定着することを願っています。彼は今後、2025 年 9 月から University of Rochester Acute Care Nurse Practitioner のプログラムに、2026 年 9 月から同大学の DNP(Doctor of Nursing Practice)へ進学予定と聞いています。DNP は実践家としての最高学位ですが、研究者とはまた別です。日本では博士課程になりますが、実践家も研究をやりなさいと言われます。アメリカは実際の臨床経験を活かすことに重きが置かれて(評価して)いて、その辺りが日本との違いです。

#### ④ 横井 友似さん

自分の殻を破り、ピースウィンズ・ジャパンで活動しています。明るく、フレンドリーで、患者さんに親身にかかわるので患者さんや管理者からとても好かれています。2009 年に江別市立病院に就職後は内科系病棟で働いていました。その後大学院に進学、2018 年に CNS の資格を取得しました。その後舎監看護師などを経て、今年の 1 月から空飛ぶ捜索医療団"ARROWS"特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパンに入職しています。

ピースウィンズ・ジャパンは、1996 年イラクで始まった日本の人道支援 NGO で、海外事業、国内事業、保護犬事業を 3 本柱にしています。災害、紛争など人道危機にいち早くかけつけ支援する団体です。実際にウクライナ (2022) やトルコ・シリア大地震 (2023)、能登半島地震 (2024) などの現場に駆けつけ、支援を継続して行っている団体です。

彼女はまず、広島県の神石高原町の地域医療事業に配置され、訪問看護師として働いています。そし

て、災害支援に関するさまざまな訓練を定期的に行うことを通して、災害時に支援が必要なのは、慢性疾患を持つ人であること、慢性 CNS としての自分の専門性を活かせることに気づいたようです。彼女は自身の役割を側面支援と捉えて、医療業務の代行や有償の訪問看護、相談窓口/コミュニティナース、情報整理/情報発信、行政や事業者への情報提供、課題解決に向けたコーディネートなどを実践し、町民が力を持てるような支援を目指して頑張っています。

活動は始まったばかりですが、今後の展望として、災害関連死を減らすため実践や研究、地域に入る初期フェーズの活動（行政や町立病院との定期会議/スタッフ教育支援、サービス事業所へのヒアリング調査の実施など）、災害支援につながる平時支援を行い、制度と現場、医療と暮らし、急性期と慢性期の「あいだ」をつなぐ存在になっていきたいと考えています。

彼女は今、台風 18 号で甚大な被害が出た台湾へ行っています。彼女の笑顔で周囲の人をなごませながら支援を届けてほしいと願っています。

最後に、慢性の CNS はまだまだ数が不足しています。もう少し数を増やして、世の中に向かって活動やその成果を発信していく必要があります。発信の内容や方法については、学会や研究会を通して検討し、実現させていただきたいと思います。

また、慢性の CNS として東さんと米田さんの活動にも心惹かれています。

東さんの省察に関する文章に出会ったとき、臨床ナースが「看護実践をしながら、自分の行為を省察し、俯瞰して考える」ことを勧めていることに驚き、とてもかなわないと思いました。

米田さんは慢性看護の CNS を養成するにあたって、実習でたくさん学生の引き受けをいただきました。心配な学生もいましたが、学生それぞれの可能性を信じたいと考え、米田さんをお願いしたところ、快くお引き受けいただき学生に大きなチャンスを与えていただきました。「どうしてこんな学生を送ってくるのですか？」と言われても仕方ないことでしたのに、感謝に堪えません。

今後もお二人のように素敵な慢性疾患看護専門看護師が登場することを願っております。

---

## リレートーク

### 研究会の20年の歩み 歴代会長に聞く

---

#### 慢性疾患看護専門看護師研究会のはじまりの

#### 物語 蒔かれた種と草創期の挑戦

#### 初代会長（2005～2008年度）添田 百合子さん

---

慢性疾患看護専門看護師研究会20周年、おめでとうございます。このような記念すべき会に初代会長としてお話しさせていただく機会をいただきましたこと大変光栄に存じます。本日は、研究会設立の背景と動機、設立当初の思い出やエピソードなどを中心としたはじまりの物語、続いて会長時代の歩みを振り返り、未来への期待についてお話をさせていただきます。

#### 研究会設立の背景

1994年、日本看護協会は専門看護師制度を創設しました。その目的は「複雑で解決困難な看護問題をもつ個人・家族や集団に対して、水準の高い看護ケアを効率よく提供する」人材を輩出することでした。まさにこの制度こそが、私たちの活動の原点となる「種」でした。この種は着実に芽を出し、2003年には、専門看護師の教育課程は全国13大学47課程にまで広がりました。しかし当時、全国の専門看護師はまだ43名にとどまり、私たちが目指していた「慢性疾患看護」の分野においては、専門看護師はまだ一人も誕生していませんでした。多くの志ある看護師たちが、道を切り拓こうと、大学院の門を叩いた時代でした。

2002年には、成人看護（慢性）専門看護師を目指す大学院の修了生が4名以上となり、分野認定に向けての活動が本格化しました。そのさきがけとなったのが、兵庫県立看護大学です。野並先生のもと、修了生が集まり、個人認定の申請書作成に取り組みました。この集まりこそが、今日の研究会へとつながる源流となりました。認定までのプロセスにおいて、私たちが学んだ最も大切なことは、「自立した専門職であれ」ということでした。いつまでも先生に指導を求めるのではなく、自らの力で道を切り拓き、仲間と共に問題を解決しながら前進できる存在になるべきだ、と。この想いこそが、研究会設立の原動力となりました。相田みつお（2000）の言葉に、「道は自分でつく

る道は自分でひらく 人のつくったものはじぶんの道にはならない」とありますが、私たちの前には道がありませんでした。自分の実践を言語化し、専門性とは何かを問い続け、自分たちで道を切り拓いていくしかありません。野並先生からは、専門看護師となっていくことへの意識の甘さを指摘され、ただ資格を取るだけでなく、プロとしての「自覚と自立」とは何かを、深く問い直す機会となりました。

2003年には野並先生が領域認定の申請をされ、翌2004年、ついに私たち4名が、初代「成人看護（慢性）専門看護師」として誕生しました。そして2005年、この研究会は産声を上げました。話し合いの末、私が初代会長を拝命することになりましたが、当時の私は30代、看護師長になったばかりで、看護実践には自信がりましたが、組織を創り、運営していく経験は全くありませんでした。職場ではいつも「他はどうしているのか」と問われますが、その「他」が存在しないのです。「自分が最初なのだ」という状況に、いつも力不足を感じ、自信のなさでいっぱい、まさに手探りのスタートでした。

#### 仲間との繋がりから力を得て活動の土台を築く

専門看護師として活動する苦労の中で、私たちの支えとなったのが、まさにこの研究会という「繋がり」でした。研究会を通して、専門看護師の教育課程を修了した仲間たちが、それぞれの出身大学や、サブスペシャリティの違いを越えて、一つに繋がっていったのです。仲間を増やすにあたって、当時はSNSもなく、日本看護協会にお願いをして、新たな認定者への連絡に研究会の案内チラシを同封していただいたり、人づてに声をかけたりと、地道な活動を続けました。研究会では、それぞれの組織で活動する上での苦労を共有し、時に励まし合いながら、次の一步を踏み出す勇気ももらっていました。この活動こそが土台となり、自分の目の前の看護の対象となる人々のため、所属組織のため、そして広く社会のために、研究会はどのような役割を担っていくべきかを考え、前に進める大きな力になったと思います。

## 課題を糧に、慢性 CNS の専門性を築く

研究会の歩みを振り返ると、いくつかの大きな転機がありました。2008 年には、専門看護分野の名称が「成人看護（慢性）」から、現在の「慢性疾患看護」へと変更され、これに合わせて私たちの研究会も「慢性疾患看護専門看護師研究会」へと名称を変更しました。この決定がなされる前、日本看護協会からパブリックコメントが求められましたが、当時の私たちは研究会として意見をまとめることができませんでした。組織としての未熟さを痛感した出来事です。また同じ2008年4月の診療報酬改定では、「糖尿病合併症管理料」が新設されました。この背景には本研究会のメンバーと日本看護協会の連携がありました。慢性疾患看護専門看護師も算定要件として認められたことで、糖尿病を持つ人々の重症化予防における看護の専門性が診療報酬上で評価されました。これは画期的な出来事であり、私たちの活動にとって大きな追い風となりました。

初代会長時代を、改めて振り返ってみます。



2005年1月15日、認定後初めての研究会を開催しました。あの時、仲間と繋がり、共に語り合う中で、自分たちの実践の可能性が広がり、未来へのエネルギーが湧き上がってくるのを肌で感じたことを、今でも鮮明に覚えています。研究会の運営方法、現場での CNS の活動の広げ方、名称変更の問題、そして糖尿病重症化予防のためのフットケアへの取り組みなど、本当に多くの課題に、役員の皆さんと取り組みました。そして、そのバトンを、東めぐみ第2代会長へと繋ぐことができました。この草創期の活動は、決して私一人の力でできたものではありません。共に悩み、働いてくれた研究会の仲間たち、多職種の同僚、活動を

理解し応援して下さった上司の方々、そして、私たちを導いて下さった恩師の先生方に、支えられて可能になりました。特に私たち慢性疾患看護専門看護師を教育して下さった先生方、今日は野川先生にもお越しいただき、貴重なお話をいただきました。先生には、学会などでお会いするたびに、いつも温かく声をかけ、激励して下さったこと、忘れません。そのような先生方をモデルに、今では本研究会のメンバーの中から、大学教員として後進の育成に尽力されている方もいらっしゃいます。まさに、種をまき、温かく、そして時には厳しく育てて下さった先生方、そして職場を始め、今日まで関わって下さった全ての方々に、心より感謝申し上げます。

## 未来への期待とメッセージ

この20年という歳月を経て、私たちの活動の場は大きく広がり、社会的な認知も着実に向上してきました。しかし、超高齢社会を迎え、疾病構造が複雑化する現代において、生涯にわたるケアを必要とする慢性の病いとともにある人々と、そのご家族を支える私たちの役割は、ますます重要になってくるでしょう。これからも、この研究会が、専門性を互いに高め合い、最新の知見を共有し、そして時には悩みや葛藤も分かち合える、温かい「梁山泊」のような場であり続けることを、心から願っています。

そして、ここに集う皆さま、さらにこれから続く専門看護師たちが、この研究会を土台として、それぞれの場で、また新たな挑戦を続けていってくれることを、心より期待しております。

文献

相田みつお（2000）：新版 にんげんだもの、角川文庫、p.114.

## 第2期の活動について

### 第2代会長（2009～2012年度）東 めぐみさん

添田さんから引き継ぎ、会長を拝命するときのことを思い出しておりました。会長として研究会を運営するにあたって、幹事の皆様にメッセージをお送りしました。そのメッセージには、当時自身の役割をどのように自覚していたのかが表れていました。特に意識していたのは、「これまで創られてきたことを、会員数が増えても継続していけるように、組織の基盤を作ること」です。そのためにもまず組織化の推進をはかりました。次に今のAPN学会の前身である専門看護師協議会との協働あるいは日本慢性看護学会との関わりを構築していくこと、加えて入退会の管理、会費の管理、会計の管理（予算案の作成を含む）、メールの管理など運営事務の整理を行ってきました。

## 第2期研究会の課題と活動方針

当時の検討課題としては、事例検討と事例報告、この異なる二つをどのように行なっていくか、次にCNSを目指す方への支援として準会員制度の整備などを行いました。

### 当時の検討課題

#### 1) 事例検討・事例報告の進め方

基本的に今まで通り、二つを行っていきたいと考えます。  
理由は私たちの実践力の向上が大切だからです。  
5月は検討事項が多いために、「事例検討」のみになりました。

#### 2) 準会員から正会員への移行について

準会員は慢性疾患看護専門看護師の認定日をもって正会員とする。  
会費は当該年度の正会員の差額分を追加で支払うものとする。  
\* 準会員でない方が認定を持って入会される可能性があるため、会費は認定日から正会員とした方がよいと考えました。

### 当時の検討課題

#### 3) 「慢性看護」の標記について

名称変更の経緯があったように、会員内の意見が必要である。今後の検討課題としてのみ提示し、検討を重ねていく。

#### 4) 会計年度と監査の件

平成21年度は22年3月31日メにして、監査もその後、行いたいです。  
22年度の会計報告は23年度の総会（現行ですと24年1月）で行うこととなります。

上記のような検討課題を踏まえ、次の基本方針を定めました。

## 1. 研究会の発展

- 1) 研究会の開催：すでに3回/年行われていた研究会においてCNSとしての実践力の向上をどのように図っていくか
- 2) 準会員の位置付けと利益の明確化：CNSを目指す看護師へのサポート体制の整備
- 3) 研究会の組織化

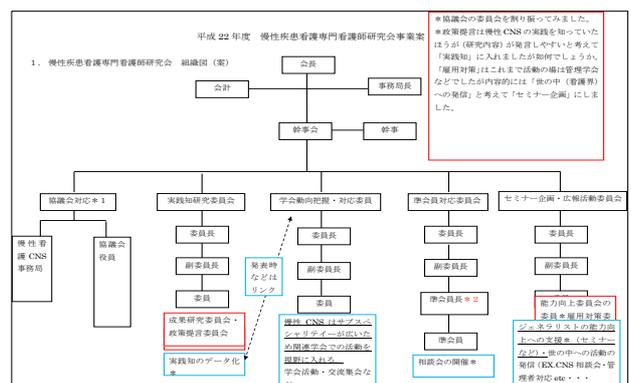
## 2. 協議会との協働

## 3. 学会や政策などへの対応

## 研究会の組織化を推進

研究会の開催方法については、これまで通り年3回とし、検討事項などは現在の研究会のスタイルとほぼ同じです。第1回の研究会は平成21年5月31日（日）に東京で行いました。検討事項は、事例検討・事例報告、協議会報告、日本慢性看護学会交流集会について、平成21年度の活動計画と意見交換についてでした。この時すでに、日本慢性看護学会の交流集会について検討されていますが、当時は学会の交流集会にエントリーするということが大変なことでした。なぜCNSが日本慢性看護学会で交流集会を行うのか、その理由と内容を説明した上で、私たちの実践を報告させていただいたという経緯があります。

研究会の組織化についてもお話しします。研究会は学習の場ですが、継続していく仕組みづくりが必要だと思いました。また、当時NPが活躍し始めた時期でしたが、そういった変化に対する慢性CNS個人の意見を集約し、全体の意見として発信していくことが重要な時期でした。そういったことから、お示しします組織図を作りました。



組織図を作成するにあたり、委員会を組成しました。委員会をつくったことで、これまでの活動を可視化することができるようになりましたし、委員会活動に参加することで、学び高め合うことができる場ができました。

また、会計など運営事務の成立についてです。当時、正会員が25名、年会費7000円でしたから、1年間の収入が17,5000円でした。加えて、準会員の方が15名いらっしゃったので、年会費は3000円で、収入が45,000円。このような皆様からの大事な年会費を活用するために、予算案の作成や監査制度などを作りました。

### 慢性疾患看護専門看護師の役割について

第3回日本慢性看護学会シンポジウムで慢性CNSの第1期生5名が慢性看護実践のフロンティアとして、自身の活動を発表されました。私はファシリテーターとして参加し、5名の方の発表を聴いて感動したのを覚えています。そこでは、人の苦悩をケアすることについて議論され、そういった慢性看護の可能性を探究していくのが、私たちの役割なのではないか、と熱く語られていました。また、対応が難しい患者さんへのケアを見せる、医師とは異なる独自の役割を果たせる職業であることを認知してもらうなどの実践についても語られ、困難に立ち向かうための道筋が見えてくる感覚がありました。このシンポジウムでは、実践において戦略を立てること、慢性看護の可能性を疑わない強さ、そういったことを学び、頑張っていこうと思いました。

CNSの役割として2008年には、日本専門看護師協議会が「高度看護実践基準」を作成、慢性看護も基準に入らせていただきました。この作業は本城さんが頑張ってくれたと記憶しています。

#### 【高度看護実践基準（2008 専門看護師協議会）】

##### 7. 慢性疾患看護専門看護師 高度看護実践基準

###### 1. 健康の保持増進、病気の予防と治療

慢性疾患看護専門看護師は、成人期にある慢性疾患からくる心身の不調や生活上の支障を抱えながら生きる人の苦悩を理解し、チーム医療の中で、他職者と協働しながら、健康及び、疾病状態のアセスメントとマネジメントのための理論的、科学的、そして臨床の知識を統合し、複雑で困難な事象に対して、質の高いヘルスケアサービスを提供する。

これらの能力は、健康の保持増進、疾病の予防、治療に組み入れられ、慢性疾患看護専門看護師の臨床実践のコアとなる。

### 第3期の活動について

#### 第3代会長（2013～2016年度）長谷 佳子さん

現在私は非会員という立場になりますが、当時の記録を通して、この時期の本会の課題が何だったのかをお伝えしたいと考えています。

### 第3期研究会の課題と活動方針

本会の会員数の推移は、2013年は77名、2016年には109名へ増加しました。幹事会の記録に、研究会の参加率が低下してきていることが記録されています。このような背景から当時は、慢性CNSが増えていく時期に、研究会としてどのように活動を活発に、円滑に行っていくかということが課題だったと思います。加えて、学会活動等において、慢性CNSが慢性看護に関して発信し続けられるように、研究会の運営の方法を検討し始めた時期でもありました。

#### 会員数の推移（4月1日時点）と当時の課題

会員の研究会参加率や、スキルアップセミナーの参加率を高め、学会活動等で慢性看護に関して発信し続けていくことができるように、研究会の運営の方法を検討する

2012（平成24）年 58名

2013（平成25）年 77名

2014（平成26）年 86名 ◀

2015（平成27）年 100名 ◀

2016（平成28）年 109名 ◀

・選挙制による役員幹事の決定

・研究会発足10周年記念講演会

2016年4月

・小グループ制による事例検討会

1グループ18名程度、全6グループ

「実践コミュニティ」概念に基づく

2016年10月

・会員情報管理の外部委託の検討開始

・課題：慢性CNSとしてのキャリアアップ

第3期は、研究会を発足してくださった添田会長、組織化を進めてくださった東会長の後を引き継ぎ、研究会としてのあり方を充実させていかなければいけない時期でした。

2014年には、役員・幹事を決める選挙制を導入し、初めて選挙が行いました。2015年には、ちょうど会員数が100名になり、研究会発足10周年の節目の年でしたので、平成27年1月12日（祝・月）新大阪にて、10周年記念講演会を行いました。野並葉子先生を招聘し、「慢性看護における卓越した技能とは」というテーマでご講演いただきました。参加者は57名でした。

また2016年4月の研究会にて、事例検討会のあり方について議論がありました。会員数が100名を超えてきますと活動の内容や活動歴の違いなどから発言しにくいということで、実践コミュニ

ティの概念を導入した小グループ制事例検討会へ切り替えました。当時は1グループ18名程度、全6グループで行なっていました。

研究会の運営は当時、研究会前夜に四役会と幹事会を行うというスタイルでしたが、本当に大変でした。また、会員情報の管理も役員の手弁当で大変で、2016年10月から外部委託の検討が始まりました。

また、慢性CNSとしてのキャリアアップを図っていかねばいけないという課題がありました。活動の一つとして形に残っています「日本慢性看護学会誌の慢性看護のエビデンス」を紹介します。これは、学会役員の先生方から多大なご支援をいただき、実現したものです。

当時の編集委員会の記録から企画意図を紹介すると、CNSが順番に原稿を担当し、既存のエビデンスやCNS自身が創生したエビデンスを解説し、それらを日頃の実践にどのように生かしているかを紹介してもらうことを計画している。これによって、慢性疾患看護に携わっている看護師への情報提供と次世代CNSの育成に資するとともに、さらなる慢性看護学の発展に寄与するものと考えられる。(編集委員会 企画書抜粋)」とあります。2013年5月の第1回目は、慢性呼吸不全患者の看護に関するエビデンスというテーマで私が担当しました。続いて、藤原さん、米田さん、伊波さん、東さん、下村さん、和田さん、小江さん、片岡さん、藪下さん、高橋さん、元木さんと順に全9回慢性CNSが担当し、2019年12月まで連載を続けていくことができました。この原稿を依頼するにあたって、みなさん貴重な経験をお持ちの方がいらっしゃいましたが、領域が重ならないようにということで、無理をお願いして原稿を書いていただきました。

サブタイトル	巻号	執筆者	発行年月
第1回 慢性呼吸不全患者の看護に関するエビデンス	7巻1号	長谷 佳子	2013-5
第2回-1 喘息患者の看護に関するエビデンス	7巻2号	藤原 由子	2013-12
第2回-2 糖尿病看護における慢性性一高血糖による身体変化に対する対応への支援	7巻2号	米田 昭子	2013-12
第3回-1 糖尿病看護における慢性性一血糖コントロールを目指す療養と生活との折り合いへの支援	8巻1号	伊波 早苗	2014-5
第3回-2 糖尿病看護における慢性性一糖尿病をもちながら、生きることを積み重ねることへの支援	8巻1号	東 めぐみ	2014-5
第4回 脳血管疾患患者の看護に関するエビデンス：高次脳機能障害患者の社会的行動障害に対する看護ケア	8巻2号	下村 晃子	2014-12
第5回 慢性心不全患者のセルフマネジメントを促進する看護に関するエビデンス	9巻1号	和田 由樹	2015-5
第6回-1 エビデンスに基づいた糖尿病腎症患者をもつ人への看護実践	9巻2号	小江 奈美子	2015-12
第6回-2 クロウ病の看護に関するエビデンス：治療法の変遷に伴うセルフマネジメント支援について	9巻2号	片岡 優美	2015-12
第7回 慢性肝炎硬変患者の看護に関するエビデンス	10巻1号	藪下 八重	2016-5
第8回 筋萎縮性側索硬化症患者の看護に関するエビデンス：ALSとともに生きる患者とその家族への支援	11巻1号	高橋 奈美	2017-5
第9回 リウマチ膠原病患者の看護に関するエビデンス：薬物治療を受ける関節リウマチ患者への支援	11巻2号	元木 絵美	2017-12

またこの時期、日本慢性看護学会に特別委員会ワーキンググループが発足、私は呼吸班に属していましたが、学術集会の前日や当日に集まって、検討会議を行っていたことを記憶しています。この頃、今の特定行為に関する議論が活発に行われていました。厚生労働省においても、少子高齢化が進むにあたって、看護師の役割拡大が活発に議論される中、大学の先生方がCNSに期待していたのは、CNSの活動を明文化し、わかりやすく発信して欲しいということでした。アルゴリズムを明文化するということや、研究とはまた違う実践を発表して欲しいということで、研究会では、毎回大きなプレッシャーを感じながら検討を重ねていたと思います。当時、色々な考え方があった中、慢性疾患看護CNSがアルゴリズムを明文化する意義が記録として残っていたので紹介します。

#### 慢性疾患看護CNSがアルゴリズムを明文化する意義

CNSが表現することによって**慢性看護のバイオニア**としての役割を明文化できる。**エキスパートナースのアセスメントを明示**することにより、医師を初めとする多職種にその**役割を可視化**して具体的に共有することができる。チーム医療は最近、**多職種連携モデル**(interdisciplinary team work; IDT)の概念が提唱されており、従来の役割分担を踏まえて、将来的に**専門看護師の役割拡大**に向かって移行する実践領域を明示する。

CNSによるケアプロトコールの作成と題した発表ポスターをお示ししますが、適切な酸素流量の調整ができない在宅酸素療法患者への対応を書き出しました。とても大変な作業でしたが、CNS同士が知恵を出し合って、こういったケアプロトコールを作成するということが大変貴重なことだったと思います。学会の会場でポスター発表を行いました。たくさん先生方からさまざまな意見をいただきました。またCNS以外の看護師から、これを使ってもいいですかといってくださいだったので、よかったなと思っています。

## 専門職集団におけるリーダーシップと集団凝集性の課題

第4代会長（2017～2020年度） 高山 望さん

会長在任時は、自身のキャリアの変化も重なって大変忙しく、取り組みについて十分振り返ることができていませんでした。本日は、会長任期中の取り組みや運営の視点について、1) 組織率の低下、2) 集団凝集性、3) 組織の活性化、グループダイナミクスという切り口でお話ししたいと思います。その際、敢えて看護とは学問領域が異なるスポーツ産業学や南極観測隊の集団活性化に関する知見を紹介します。今後研究会の活動にどのように貢献できるかを考えるヒントになればと思います。

### 第4期研究会の役割

まずは私が会長を担った4年間までの研究会の活動についてお話しします。初代会長の添田さんは、フロンティアとしてこの研究会の土台を作られました。2代目会長の東さんは、当時私も幹事・会計として参加させてもらいましたが、研究会の組織化を戦略的に、意図を持ってやってこられました。トップマネージャとして尊敬しています。3代目会長の長谷さんは、作られた研究会の凝集性をどのようにしていくか、これまでの成果を踏まえて、次への一步を踏み出すということをした会長です。私は次、何をしようと考えていたのですが、それを形にする前にCovid-19のパンデミックが起こり、研究会の形をどういうふうにしたらいいのか、すごく考えました。

私の会長任期期間は、2017～2020年度です。任期中に力を入れて行なったこととして、会員数の増加に対応できるよう、まずは事務委託の整理に取り掛かりました。また、前任の長谷会長の任期中に事例検討会の運営方法が変わりましたので、その評価を行い、グループメンバーの入れ替えを行いました。

### 2. 会長任期中の取組み（2017～2020年度）

- 業務委託の整理：会員数増加に伴う事務業務の増大、規約改正  
    メンバーリストの移行作業
- 事例検討会の評価とメンバー入れ替え
- Zoomリモート開催の開始：COVID-19パンデミックの経験より
- 財源の確保：会費の増額、会場費の節約
- ホームページ開設の下準備
- 15周年記念事業の一部開催
- 関係機関との連携強化 など

2025/10/12

敬愛ST いっほにはさん 高山

5

研究会の開催方法については、Covid-19のパンデミックの経験から、ZOOMを用いてリモートで開催できるようにしました。あとは財源の確保にも力を入れました。ホームページやWebサイトの開設が必要だと思っていたのですが、なかなかスムーズに合意が得られず、私の代では、会費の増額や会場費の節約など財源確保を必要な準備として行ない、HP開設の合意を総会で得るところまで行いました。

15周年の記念事業も計画していましたが、Covid-19の大流行によって内容は一部開催にとどまりました。またこのような時期は、関係機関との連携強化も重要と考え、日本専門看護師協議会や日本慢性看護学会とどのようにコラボレーションしていくかを考え、事業案に組み込んでいきました。

### 第4期研究会の課題と活動方針

運営の視点として、1) 全国区で物理的距離が遠いことへの配慮、2) ライフサイクルとキャリア形成、3) 本業と研究会活動との両立による負担感や疲弊感の軽減、4) 専門職としての自立性を尊重する、の4つを重点的に取り組みました。

#### 1) 全国区で物理的距離が遠いことへの配慮

研究会は全国区で、物理的距離が遠かったですが、それでもこの研究会に参加して学びを得たいという会員の皆さんの困難さをどうにかしたかったのと、Covid-19の大流行によって研究会の参加率の低下が懸念されました。三密を避けるためにリモート開催を開始しましたが、これが怪我の功名と言いますか、会員の皆さんの参加率はアップしました。

## 2) ライフサイクルとキャリア形成

出産、育児、介護、療養などのライフサイクルの中、同じ熱量で研究会に参加することは、男女を問わず難しいです。ワークライフバランスはどちらか一方を優先するという考え方ですが、そうではなくワーク・ライフ・ハーモニー（仕事と生活を対立させずお互いに調和し、融合し合うことで人生を豊かにしようとする考え方）をプロフェッショナルとして持ちつつ、活動するのがいいと私は考えます。

## 3) 本業と研究会活動との両立による負担感や疲弊感の軽減

幹事、四役の皆さんは職場で責任の重い立場にあると思いますが、さらに研究会の役割も担ってくれています。自分のプライベートな時間、自己研鑽の時間を削って、研究会に貢献してくれているということをわかって、大事にするべきだと思います。また会社だと、利潤追求など、向かっていくべき方向がわかりやすいですが、研究会はそうではありません。だからこそ、何を本質と考えて、研究会に何を見出していくかがとても重要になります。研究会に参加した会員が、例えば「楽しさ、パワー、知識、ノウハウをもらえる」「全国に慢性 CNS の仲間を作ることができる」「客観的示唆・メンターシップを通して成長する機会とする」等の付加価値を見出すことができれば、負担感は軽減するのではないかと考えて運営してきました。

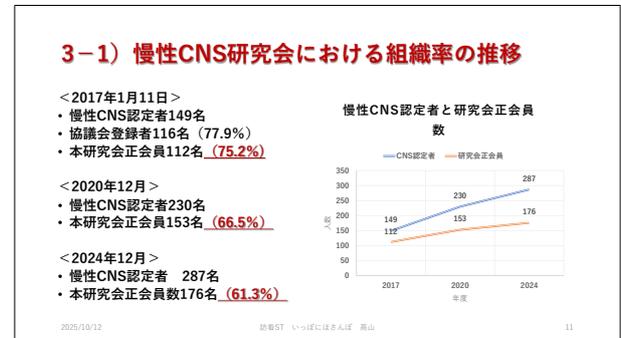
## 4) 専門職としての自律性を尊重する

最後に、専門職としての自律性を尊重するということです。研究会は、医療や看護の質向上、役割開発など共通した課題を持つ仲間との活動です。自らの目標や計画を立案できる専門職だからこそ、一人一人が輝ける場や機会を研究会で生み出すことができます。専門職としての活動を互いに紹介して、刺激し合うことで、自分の立場に置き換えたらどういう活動ができるだろうかと考えていける、そういう場も研究会に設けてきました。

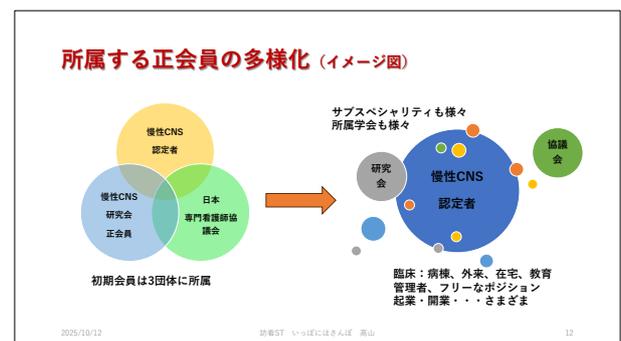
## 活動の振り返り

振り返りの視点としては3つ考えてきました。

1) 組織率の低下、正会員の多様化、2) 集団凝集性（スポーツ産業学）、3) 組織の活性化、グループダイナミクス（南極観測隊）です。



組織率の推移については、スライドの通りです。慢性 CNS は増えてきていましたが、研究会の正会員数はそれと並行には増加せず、組織率は低下してきていました。同じ慢性 CNS であっても背景として、サブスペシャリティ、所属学会、活動の場も病棟、外来、教育機関などさまざま、役割や立場もスタッフ、管理者、フリーランス、起業しているなど多様化していました。初期会員は、慢性 CNS として、研究会や日本専門看護師協議会の会員となるのが当たり前でしたが、それぞれの立場を尊重し、いろんな参加の仕方を許容する必要があると考えました。



集団の凝集性についてはスポーツ産業学の分野で参考にできる考え方があり、「集団凝集性とチームパフォーマンスは正の関連がある」と報告されていました。集団凝集性は、「メンバーの親密さ」「チームワーク」「魅力」「価値の認められた役割」「目標への準備」と関連があるようで、慢性 CNS 研究会の実際の活動を説明しうる考え方だと思いました。

さらに南極観測隊という専門家集団の組織活性化がどのように促進されたかを明らかにした質的研究にも、集団の凝集性は最終的には集団の活性化や集団の専門性の向上につながるとあり、そのプロセスには「自己を変化させる」「専門性のサイロ化（情報共有が不十分なさま）を俯瞰してみる」「集団の視点をもつ」など、研究会の活動や発展に共通するものがありました。研究会は今後も正会員の多様化は進むと思われますが、こういったことを大切にすれば、集団の活性化を促進できると考えます。最後に、改めて会長としての活動を振り返り、リーダーとしてやるべきことはやれていたのかなと考える機会をいただきました。ありがとうございました。

#### 参考文献

- ・持田 和明他（2015）：チームスポーツ競技における集団凝集性および集団効力感に影響する個人要因の検討 - 構成員のライフスキルが集団に及ぼす影響-, スポーツ産業学研究, 25(1), 25-37.
- ・科部 元浩（2017）：専門職集団におけるグループダイナミクス, Transactions of the Academic Association for Organizational Science, 6(1), pp25-30.
- ・科部 元浩（2018）：専門職集団における非定常的業務の活性化要因に関する研究 - 第48次南極観測隊の事例として -, 中央大学大学院研究年報（戦略経営研究科篇, 6, pp1-23.

---

### 第5期の活動について

#### 第5代会長（2021～2024年度） 東めぐみさん

---

2021年から再び研究会の会長を担うということを決心しました。それは自分の年齢的なこともありますが、これまで育てていただいた研究会と、仲間の皆さんに感謝の気持ちを込めて、貢献できたらと思いました。私の会長任期は、2021年から2024年です。

### 第5期研究会の課題と活動方針

今の高山会長のお話を聞いていて、経営者ってすごいなって思いました。またちょうど Covid-19

の大流行の際には、その大変さを見ていました。まず研究会が開催されない、そうすると研究会の会費はどうするのか、会費分の成果を皆に還元できないかどうするかという議論がありました。15周年記念事業も計画してくださっていましたが、できないとなりましたし、それからHPです。私たちの活動をどう発信していくのかを考えて準備をしてくださっていたので、会長として、それらをしっかり引き継ぎたいと考えていました。

特に、先ほど高山会長も言うておられました。私たちがこの研究会に関わることで自分たちにどんな利益があるのかを考える必要がありました。当時は Covid-19 の影響が薄れてきた時代でもありましたが、Covid-19 の流行時に CNS は何を考えてきたのかを聴くと、いろんな部署に行っているいろんなことをやったが CNS としての役割を發揮できないジレンマがあったというようなことが出てきました。そこから、この第5期は、CNS 同士のつながりを強める場、情報交換の場であるとともに、各持ち場で役割を遂行するうえでのエネルギーの補充の場としての役割を果たすことが大切だと見えてきました。加えて、組織率の低下のお話が出ていましたが、CNS の資格を得た方に入会していただくにはどうしたらいいか、研究会の参加率が上がらないことへの対策も考えなければなりませんでした。

### 2021年度の運営方針

2021年度の運営方針は、「明日も頑張ろう」と思える研究会の運営」でした。この言葉は幹事の皆さんが考えてくださったのですが、私自身も励まされました。Covid-19 で大変だったけれども、得たものもあったのではないのでしょうか。会員からは「忙しい Covid-19 の対応の中で、研究会に参加することで、明日も頑張ろうと励まされた」という声があり、これからも参加者がそのように思える研究会にしたいと思いました。向上することは大事なことです。同様に維持することも大事なことだと気づきました。

## 2021年度 運営方針 「明日も頑張ろう」と思える研究会の運営

- 昨年度、高山前会長はじめ幹事の皆様のご尽力で、1月に研究会が開催されました。
- 事例検討会等に参加した皆様から「忙しいCOVID-19の対応の中で、研究会に参加することで、明日も頑張ろうと励まされた」というお声を多くお聞きしました。この思いこそ、本会の大事な宝ものと思い、幹事の皆さんと共に決定いたしました。

2021~2022年度の活動の骨子はスライドの通りです。会員同士がつながる場となる活動のほか、会員管理のスリム化にも力を入れました。

### 活動の骨子

1. 慢性CNS自身が知識や技能、態度を磨く場（事例検討会・セミナー企画）
2. 慢性CNSの実践知（活動含む）の明確化（研究事業）
3. 看護の質の向上への寄与（自分達の活動成果を現場に還元する）
4. 会員間がつながる場となる（事例検討会・交流会・セミナー企画）
5. 会員の活躍の場と活用促進（交流会）
6. 会員の更新支援（事例検討会）
7. 専門看護師認定者で未加入者に対する入会勧誘（新規認定者、未加入者）
8. 広報活動（日本慢性看護学会HP「CNSのひろば」へのコンテンツ提供、本研究会HPの開設）
9. 会員管理の利便性とスリム化（HP・業務委託）

重点課題としては、1) Covid-19 禍における年3回の研究会の開催、2) HPの開設と運営のほかに、3) 研究事業「慢性疾患看護専門看護師の活動の実態」の推進、4) 将来構想事業の検討会の立ち上げを考えていました。

### ホームページの開設と運営について

ホームページ開設の目的は、研究会会員のよりどころの場となるということと、社会に向けて本会の活動を発信し役割を伝えることにありました。立ち上げの準備は、高山会長の代に綿密に計画され、会費を上げるなど資金確保も行なっていたいただいております。それもあって、なんとか任期2年間の間にホームページを開設したいという思いがありました。当時の収支状況などを確認の上、開設およびその後の維持管理が可能であることを確認の上、ホームページの開設準備に入りました。ホームページのデザインやコンテンツ内容など具体的なことについては、多くの方に参画してもらいたかったのと、知っている方に関わっていただきたかったので、プロジェクトメンバーを募集し、広報活動委員会の方々にも入っていただきました。

### 2023年度の活動方針

「慢性看護とともに人とつながる、時代とつながる、そして未来へつなげる」としました。人とつながることを大事にしようというのはこれまでと同じなのですが、時代とつながるといのは新しいフレーズです。HPという新たなツールを得たこと、Covid-19の経験から研究会のリモート開催など思いがけないメリットを得たことが影響しています。そのような背景の中、活動方針を検討するにあたって、つながり、きずなという言葉がよく使われていました。

#### 2023年度の活動方針：

#### 慢性看護とともに人とつながる、時代とつながる、そして未来へつなげる

- 2023年に入り、ようやくポストCOVID-19の時代を感じるようになりました。
- WEBでの研究会を継続しそのメリットも実感したのも事実です。
- 2023年度は対面での研究会を開催したいと考えました。
- 計画を検討する中で、「つながり」「きずな」という言葉が多く出てきました。
- COVID-19の特性から人と人との接触を極力避ける方針があり、私たちは個々の場所で、個々で悩みながら頑張ってきました。
- これからは少しずつ、個々で頑張ってきたことを共有し、COVID-19ともあった経験も踏まえて、改めて慢性看護について考えることで、何らかのエネルギーとなって歩いていくことができるのではないかと考えました。

2023年度の重点課題は、次のとおりです。

#### 2023年度 重点目標

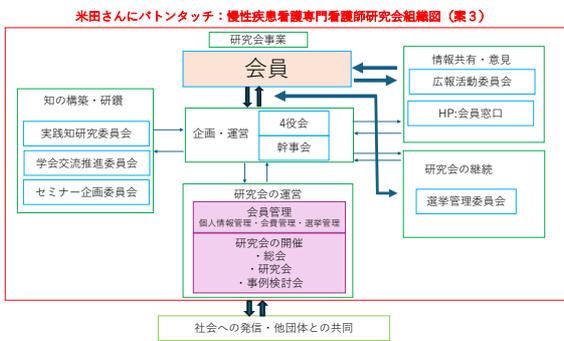
- 1) CNSが知識や技能、態度を磨く場……研究会
- 2) CNS同士がつながる場……研究会・事例検討会・セミナー後の語り合いの会・HPやMLの活用
- 3) 慢性看護の知の創出と発信……研究活動・委員会活動・学会での公表
- 4) CNSの更新支援……研究会
- 5) CNSの活躍の場を推進する活用促進……学会発表・委員会
- 6) CNSの活動を社会に発信し、社会とつながる……HP・20周年事業の準備
- 7) 会員管理のスリム化と利便性……会員システムの構築・業務委託・会員の増員
- 8) 慢性疾患看護専門看護師を目指す方への支援ニーズの把握

HP開設については、広報活動委員会の皆さんがご尽力くださいました。開設当時の広報活動委員 委員長の水野さんからは、HPの活用について、今後も様々なCNSの活動をアップしていくことで、閲覧者数を増やしていきたいと言われていました。HPができたことで、仲間の活動を共有することを通して学べる場ができたと同時に、自らの手でCNS活動を発信していくことができるようになったことが素晴らしいと思います。

もう一つは実践知研究委員会の活動です。私たちの実践知をいかに学術的に価値のあるものとして発表していけるか、それも研究会の課題でした。第5期においては、2本の論文が日本慢性看護学会誌に掲載されました。

- 柏崎純子, 上原喜美子, 片山将宏, 嶋田幸子, 園田由美, 本城綾子, 三好智佳子: 慢性疾患看護専門看護師の活動の実態, 日本慢性看護学会誌, 第 17 巻, 2023
- 片山将宏, 本城綾子, 三好智佳子, 嶋田幸子, 加澤佳奈, 松本光寛, 片岡千明: セルフケア行動に変化が起きる前段階の慢性疾患看護専門看護師のケアと慢性疾患患者の変化, 日本慢性看護学会誌, 第 19 巻, 2025

次に、未来へ繋ぐという活動方針についてです。当時、選挙投票率の低さや、当選した方が幹事を受けられない事情があるなど、研究会の運営がかなり逼迫していました。研究会の活動を未来に繋げるためにはどうしたらいいか悩んでいた時に、セミナー企画委員会 米田さんがシェアリーダーシップの研修会を2年連続で計画してくださいました。その研修でユニクロの組織図を見たのですが、はっとしたというか、当会の組織図に会員がいないということに気づきました。そこで当時の幹事の皆様にもご意見をいただき、組織図を改訂し、米田さんに引き継ぎました。



もう一つ引き継ぎたいこととして、ロゴマークをご紹介します。これは HP プロジェクトチームの戸沢さんが中心になって作成してくれました。ロゴには、ベンジャミンの葉や幹がモチーフとなっており、研究会員同士のつながりが紡がれ、やがて太い幹となっていく様子が表現されています。私たちの思いがこのように図になったことが嬉しく、引き継いでいきたいと思いました。

## 第6期の活動について

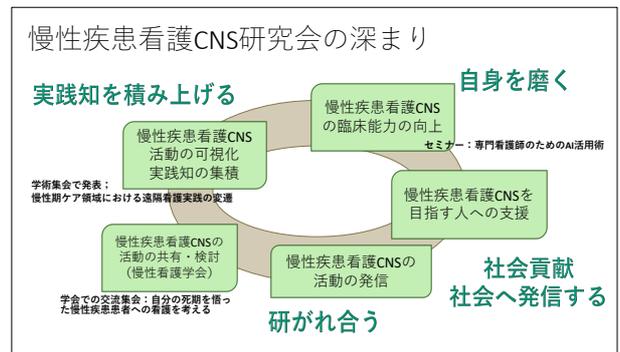
第6代会長（2025年度～） 米田 昭子さん

これまでの歴代会長のお話を聴いて、きっと皆さんにも今回の記念事業のテーマであります、痛みも希望も未来も共につむいできたという実感が湧いてきたのではないかと思います。

## CNS 研究会の広がりや深まり

まずは広がりについてお話しします。慢性疾患看護専門看護師研究会は、4名のCNSからはじまり、2024年には会員数185名と増えました。サブスペシャリティは多様化し、外来、訪問看護、血液疾患などをサブスペシャリティにする方もおられます。また所属については、病院がほとんどですが、外来、地域での活動の他起業される方もおられます。地域的には、まだ慢性CNSがゼロの県もありますが、北海道から南九州まで、均てん化が進んでいます。

そして深まりとしましては、これまでの活動が身を結び、いろいろな委員会活動、ホームページも立ち上がり、充実してきています。これは、個人として、また慢性看護を志向する集団としての実践知をつみあげてきたこと、研究会でのディスカッションを通して自身を磨いてきたことの成果であります。何より同じ慢性看護を目指す、同じ方向を向いている人同士で厳しい意見を戦わせながら、研がれあっていくことができるというのが研究会ならではの、こういったことがこれまで20年の私たちの成果だと考えています。



## CNS を取り巻く状況の変化

更なる発展を目指していくにあたって、今 CNS を取り巻く状況は変化してきています。日本看護協会における CNS 認定・更新方法が今年度から変更

されました。また CNS 協議会は学会化し、日本高度実践看護学会と名称が変更され、CNS 以外の方にも会員の門戸を広げるといことです。CNS は、高度実践看護の担い手としての存在意義を示していくことが求められています。また NP（診療看護師・JANPU-NP）とどう協働していくかが問われています。その他対応していかないといけないこととして、医療・福祉・保健状況の変化、社会の変化もあります。こういったことを踏まえて研究会は、これまで 20 年の成果や確かな軌跡を原動力にして、柔軟でありながら、力強く、たくましさ具备了組織となっていくことが、今期幹事の願いです。

### 未来へ向けての課題

未来へ向けての課題はいくつもあります。これまでもお話がありましたが、研究会の会員数は増えていますが、慢性 CNS の増加には比例しておらず、2024 年度末には退会者も増えています。新しく認定された方が全会員員になってくださるわけではありません。会員の確保は、研究会の質や原動力に繋がりますので、なんとか確保していきたいと思えます。そのためには魅力ある研究会、会員の実践に役立つ企画、運営をしてくことが今期幹事に求められていることだと認識しております。また、仲間内で内向きに頑張るだけでなく、慢性看護のプロフェッショナルが集まっていることを活かし、社会にとって意義ある存在となっていくように努力していく課題があると思えます。

では、何をするか、ここをこれから皆様と考えていくわけですが、今簡単には言葉にしていけないと思っています。今言えることは、苦悩しつつも、それが充実したものとなるように、楽しんでいきたいということです。また私は、組織としての柔軟さを保っていくことがとても大切だと思っています。私たちは、慢性病患者の人や家族を支えるという仕事をしながらも、支えられているという体験をしています。一方的に支えるということではなく、支えられている自分を絶えず実感していくこと、そして相手にも支えてもらっているんだなと思ってもらえるような、余地ある集団になっていけたらいいなと考えています。お疲れのところ、最後までありがとうございました。

## 交流集会

### CNS がつながる未来を語り合う

九州慢性看護実践研究会

司会・進行 岡 佳子

活動紹介 武末磨美

慢性疾患看護専門看護師（以下、慢性 CNS）は、VUCA (Volatility: 不安定さ、Uncertainty: 不確実性、Complexity: 複雑性、Ambiguity: 曖昧さ) の時代における看護の担い手として互いに切磋琢磨し成長し続けていくことが求められています。本交流集会では、2012 年に設立された九州慢性看護実践研究会が、これまで「看護の語り」を通じて支え合い、研鑽してきた活動を紹介し、慢性 CNS 同士が“つながる”場のあり方を再考する機会を提供しました。

10 グループに分かれて 30 分間のディスカッションを行い、その後、以下のような内容が発表されました。

- 地域特有の問題でも気軽に相談できたし、自組織でもいさせる内容だった。
- 今、自分の直面している問題が同じ領域だからこそ分かり合えるピアな場の提供となった。



## 閉会の挨拶

### 第5代 慢性疾患看護専門看護師研究会会長

東 めぐみ

皆さん、今日一日ありがとうございました。  
野川先生、ご講演いただき、ありがとうございました。  
また歴代の会長の皆さまにもお話いただき、心より御礼申し上げます。

改めて20年という時間を皆で積み上げてきたということを感じると共に、またこれから新たにというよりは、さらに積み上げていく、そういう機会に恵まれたと思います。今日、皆さまとこうやって時間と空間を共に過ごせたことは、とても意義深いことだと思っております。

最後に九州の皆さまにご発表いただき、皆さんにも積極的にディスカッションに参加いただきました。ディスカッションの場で皆さんがいきいきと語られている様子を拝見し、同じCNSだから相談したいことや共有したいことが自然と生まれてくるのだなと改めて感じました。明日からもまた、1日1日を大切に積み重ねていければと思います。

今回の記念事業は、高山会長が企画された15周年記念事業が、Covid-19の流行によりシンポジウムのみで開催になってしまったという経緯があり、そこから5年という月日をかけて準備をしてまいりました。また元木さんがまとめてくださった研究会の歴史については、ホームページに掲載される予定ですので、ぜひご覧ください。

時間とおりに進行くださった司会の皆さま、長く企画を担当くださった皆さまに、改めてお礼申し上げます。今日は本当に、ありがとうございました。



### 3. 研究会の歴史

#### 1) 研究会について

慢性疾患看護専門看護師（Certified Nurse Specialist in Chronic Care Nursing；以下、慢性 CNS）の教育は、1997 年に兵庫県立看護大学 成人慢性領域 慢性疾患看護専門看護師教育課程で開始されました。2003 年 7 月には、日本看護協会専門看護師の一分野として「成人看護（慢性）」が特定され、翌 2004 年、当分野の専門看護師 4 名が誕生しました。その後、教育課程は増加し、慢性 CNS は 2024 年 12 月時点で 287 名になりました。

私たちは 2003 年から事例検討会を継続し、専門看護師だけでなく、専門看護師教育課程修了者や将来専門看護師を目指す人々にも門戸を開いて、慢性病を患う人の看護について考える機会をつくってきました。こうした活動が原型となり、全国規模の研究会へと発展しました。

2007 年、当分野が「成人看護（慢性）」から「慢性疾患看護」へ改称されたことに伴い、事例検討会も『慢性疾患看護専門看護師研究会』と名称を改めました。さらに、研究会の会員資格を慢性 CNS に限定し、慢性 CNS 同士の協働と研鑽を目的とする組織へと拡充しました。

2003 年に事例検討会から始まった慢性疾患看護専門看護師研究会は、今年、20 年周年を迎えました。研究会の会員数は 175 名（2025 年 4 月時点）となり、研究会と事例検討会を年 3 回開催しています。研究会では、日本慢性看護学会 交流集会の企画、スキルアップセミナーの企画、慢性看護の実践知を明らかにする研究、ホームページを活用した情報発信などを、主な活動としています。

#### ロゴマークについて

2024 年のホームページ開設にあたり、研究会のロゴマークを制作しました。ロゴには、慢性疾患看護専門看護師研究会の英語表記 *Research Conference By CNS in Chronic Care Nursing* の頭文字 RECOCC（リコック）と、ベンジャミンの葉や幹をモチーフにしています。

ベンジャミンの花言葉は「信頼」「融通のきく仲間」であり、研究会員同士のつながりを象徴しています。観葉植物として親しまれているベンジャミンは、控えめに寄り添い、必要なときに癒しをもたらすたずまいが、私たちの専門性に重なります。また、ロゴ全体を丸い時計盤の形にして、「慢性」という連続した時間を表現しました。外周をらせん状にデザインしているのは、ベンジャミンの幹がそのように成長する特徴を表すとともに、研究会員同士のつながりが紡がれ、やがて太い幹となっていく未来を願ってのことです。



## 2) 歴代会長と役員

当研究会は、添田 百合子さん、伊波 早苗さん、米田 昭子さん、魚里 明子さん、西木（曾根）晶子さん、馬場 敦子さん、森 菊子さんをメンバーとして発足しました。その後、2代会長 東 めぐみさんの時期に、副会長、事務局、会計、学会動向把握・対応委員会、セミナー企画・広報活動委員会、実践知研究委員会、準会員対応委員会が設置され、組織化が進みました。

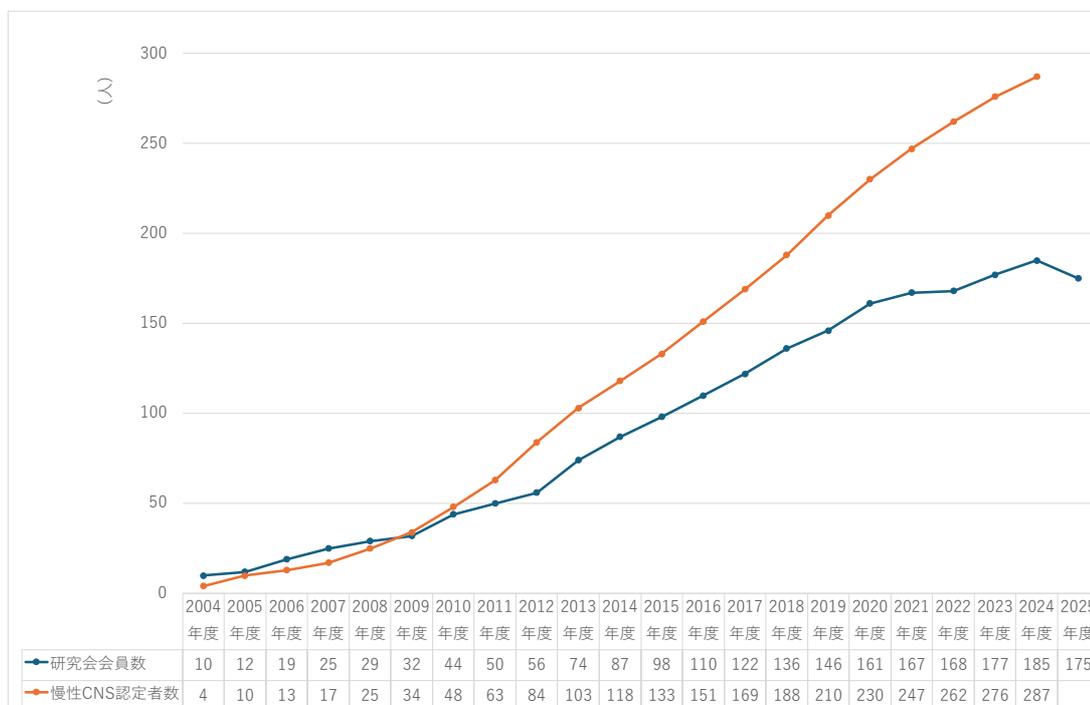
社会や会員の要望を踏まえて、当研究会の方向性や事業計画を検討し、運営を取りまとめてきた幹事一覧は、以下の通りです。委員会の委員長や副委員長は、主に幹事が務めてきましたが、ここに掲載されていない多くの正会員の方が委員として活動しています。

時期	会長（敬称略）	幹事役割（敬称略）
2005(発足) ～2008年度	添田 百合子	
2009～2010年度	東 めぐみ	事務局：鈴木 智津子 会計：高山 望 学会動向把握・対応委員会 ：藪下 八重、小江 奈美子、高山 望、竹川 幸恵、米田 昭子 セミナー企画・広報活動委員会：中尾 友美、竹川 幸恵 実践知研究委員会：馬場 敦子 準会員対応委員会：長谷 佳子
2011～2012年度	東 めぐみ	副会長：長谷 佳子 事務局：仲村 直子 会計：高山 望 学会動向把握・対応委員会：藪下 八重、竹川 幸恵、高山 望、仲村 直子 セミナー企画・広報活動委員会：中尾 友美、和田 由樹 実践知研究委員会：高橋 奈美、鈴木 智津子、添田 百合子 準会員対応委員会：高樽 由美 その他（専門看護師協議会 慢性領域事務局）：本城 綾子
2013～2014年度	長谷 佳子	副会長：高樽 由美 事務局：元木 絵美 会計：藤井 利江 学会動向把握・対応委員会：本城 綾子、小崎 綾子 セミナー企画・広報活動委員会：市川 美生、中尾 友美、和田 由樹 実践知研究委員会：丹生 淳子 会計監査：高山 望、藤原 由子
2015～2016年度	長谷 佳子	副会長：本城 綾子 事務局：元木 絵美 会計：藤井 利江 学会動向把握・対応委員会：武田 真弓、畑中 あかね セミナー企画・広報活動委員会：馬場 敦子、伊波 早苗 実践知研究委員会：片岡 優実 選挙管理委員会：仲村 直子、佐藤 真理子 会計監査：中尾 友美、野中 共子 その他（専門看護師協議会 慢性領域事務局）：鶴澤 久美子

2017～2018 年度	高山 望	副会長：畑中 あかね 事務局：植木 博子 会計：武田 真弓 学会動向把握・対応委員会：山尾 美希 セミナー企画・広報活動委員会：戸沢 智也 実践知研究委員会：松元 智恵子 選挙管理委員会：井上 智恵
2019～2020 年度	高山 望	副会長：今戸 美奈子 事務局：井上 智恵 会計：長谷川 智子 学会交流推進委員会：山尾 美希 セミナー企画委員会：山本 弥生 実践知研究委員会：柏崎 純子 広報活動委員会：戸沢 智也 選挙管理委員会：鶴澤 久美子
2021～2022 年度	東 めぐみ	副会長：柏崎 純子、園田 由美 事務局：武田 真弓、桃坂 真由美 会計：元木 絵美 学会交流推進委員会：和田 由樹 セミナー企画委員会：上原 喜美子 実践知研究委員会：片山 将宏 広報活動委員会：山本 弥生 選挙管理委員会：鶴澤 久美子
2023～2024 年度	東 めぐみ	副会長：伊藤 史、戸沢 智也 事務局：上原 喜美子、山尾 美希 会計：元木 絵美 学会交流推進委員会：渡辺 美和 セミナー企画委員会：米田 昭子、岡 佳子 実践知研究委員会：片岡 千明 広報活動委員会：永淵 美樹、西 依見子 選挙管理委員会：宗村 文江
2025 年度～	米田 昭子	副会長：植木 博子、戸沢 智也 事務局：鶴澤 久美子、柏崎 純子 会計：伊波 早苗 学会交流推進委員会：園田 由美、渡辺 美和 セミナー企画委員会：下村 晃子、加藤 かほり 実践知研究委員会：猪飼 やす子、片岡 千明 広報活動委員会：増田 誠一郎 選挙管理委員会：宗村 文江

### 3) 会員数の推移

慢性疾患看護専門看護師は2024年12月時点で287名となり、そのうち175名(61%)が当研究会に所属しています。当研究会の会員数推移は以下のとおりです。



参考) 日本看護協会ホームページ データで見る専門看護師 専門看護師認定者数推移

<https://www.nurse.or.jp/nursing/qualification/vision/cns/index.html> (2025/09/01 閲覧)

### 4) 主要事業の実施状況

#### (1) 事例検討会

当研究会は、発足当時から事例検討会を大切にしてきました。実践事例を検討することを通して、事例提供者のみならず参加者も自己の実践を振り返り、明日からの実践に役立つ示唆を得て、成長に繋げてきました。事例検討の運営方法については、当初60~70名前後の参加者が一つの事例を複数グループに分かれて検討していました。事例提供を含む企画・運営担当者の3名は幹事会で選出され、副会長や幹事からアドバイスを得て、事例検討会を行ってきました。

2015年からは、会員相互が交流の中で検討テーマを見出し、学び合える場となるように、「実践コミュニティ」の考え方を活用した小グループ制での事例検討会へ運営方法を変更しています。小グループは、出身大学院やサブスペシャリティ、認定年度が重複しないように8~10名で編成し、2年間はメンバーを入れ替えなくて運営しています。

## (2) 日本慢性看護学会 交流集会

日本慢性看護学会 第1回学術集会において、慢性 CNS の第1回認定者が「実践のフロンティア」と題したパネルディスカッションで活動を紹介し、後続の良きモデルとなってくれました。以降は毎年、交流集会で慢性 CNS の看護実践事例を発表し、高度実践の可視化、エビデンスと看護実践を繋ぐ活動を続けています。

年度 (学術集会)	テーマ	企画代表者* メンバー (敬称略)	会場
2008 (第2回)	「病みの軌跡を方向づけることができるように助ける」看護 ~心機能悪化で治療法・人生の選択を迫られた患者へのケアを通して考える~	鈴木 智津子* 小江 奈美子 仲村 直子 松岡 綾子 佐々木 奈美 中尾 友美	日本赤十字看護大学 (東京都)
2009 (第3回)	慢性疾患患者の終末期医療における看護 ~終末期にある慢性呼吸不全患者の苦痛を緩和するケアを考える~	竹川 幸恵* 本城 綾子 藤原 由子 長谷 佳子	東京大学本郷キャンパス (東京都)
2010 (第4回)	神経難病患者の希望を支える看護 ~胃瘻造設における ALS 患者の意思決定の支援~	高橋 奈美* 本城 綾子 片岡 優美 山田 栄美	かでの2・7 (北海道)
2011 (第5回)	新たな治療を受ける外来患者の不確かさへの支援 -インターフェロン療法を受ける患者の事例を通して-	鈴木 智津子* 長谷 佳子 高山 望 斎藤 美子	岐阜県立看護大学 (岐阜県)
2012 (第6回)	慢性心不全患者における途切れそうな医療をつなぐ外来看護	藤原 由子* 和田 由樹 湯浅 梨香 高山 望	アクトシティ浜松コング レスセンター (静岡県)
2013 (第7回)	慢性疾患看護専門看護師が行う循環器病棟看護師へのコンサルテーション ~入退院を繰り返す心不全患者の事例を通して~	武田 真弓* 下村 晃子 松元 智恵子 藤井 利江 米田 昭子	兵庫医療大学 (兵庫県)
2014 (第8回)	病みの行路を方向づけられずにいる患者への看護 ~二次性糖尿病患者の自己コントロール感の獲得に向けた支援~	高樽 由美* 元木 絵美 有井 千恵 曾根 晶子	ホテルマリターレ創世 久留米 (福岡県)

2015 (第9回)	自主退院後、治療の継続が必要であった糖尿病患者への看護 ~パートナーシップの構築に向けた支援~	須森 未枝子 * 山尾 美希 佐藤 真理子 藤原 由子	大阪医科大学看護学部 (大阪府)
2016 (第10回)	腎代替療法の治療選択時期にある慢性腎臓病患者への意思決定支援 ~身体と治療に向き合うための援助を通して~	戸沢 智也 * 畑中 あかね 藤井 利江 湯浅 梨香	一橋大学一橋講堂 (東京都)
2017 (第11回)	高次脳機能障害がある人に対する生活習慣病の進行を防ぐための外来看護	片山 将宏 * 市川 美生 高津 咲恵子 西村 はるよ	佐久大学(長野県)
2018 (第12回)	進行性拡張型心筋症患者と家族の病気移行期を支える看護 ステージC期~ステージD期の移行期に焦点をあてて	有泉 優子 * 和田 由樹 北村 幸恵 山田 吉子 山尾 美希 長谷川 智子	TKP ガーデンシティ (東京都)
2019 (第13回)	チーム医療における「協働」について考えてみませんか ~2型糖尿病患者の事例を通して~	川口 麻衣 * 桑木 由美子 永渕 美樹 山尾 美希 長谷川 智子	神戸市看護大学 (兵庫県)
2020 (第14回)	高次脳機能障害をもつ患者の退院支援 ~その人らしい生活を送るための支援を一緒に考えてみませんか~	増田 誠一郎 * 前田 直子 瀬尾 昌枝 市川 美生	Web 開催(群馬県)
2021 (第15回)	急性増悪した筋萎縮性側索硬化症: ALS 疑い患者の意思決定支援 ~CNS の倫理調整を振り返る~	宮崎 博士 * 長谷川 智子 高山 望 渡辺 美和 高井 奈津子 樋口 秋緒 河村 美穂	Web 開催(佐賀県)
2022 (第16回)	その人の望む生き方を支える CNS の調整 ~透析導入後、認知症を抱えながら一人暮らしを続けるための支援について考える~	米村 朋代 * 山尾 美希 本吉 裕美子 今澤 美由紀 石崎 香織 伊藤 史 加藤 かほり 和田 由樹	ハイブリット開催: 一橋大学一橋講堂(東京都)
2023 (第17回)	専門看護師同士の事例検討での学び	今井 由佳 * 竹田 美樹 鈴木 絵夢 友村 秀佳	ステーションコンファレンス川崎(神奈川県)

		本吉 裕美子 石崎 香織 伊藤 史 加藤 かほり 山尾 美希 和田 由樹	
2024 (第 18 回)	その人らしい療養生活を継続するための 「つながる」支援	能見 真紀子* 坂本 貴紀 新屋 理良 武末 磨美 寺尾 多恵子	神戸国際会議場(兵庫県)
2025 (第 19 回)	自分の死期を悟った慢性疾患患者への看護を 考える～慢性心不全患者の事例を通して～	藤川 真弓* 吉田 美樹 秋吉 美典 伊山 美穂 鈴木 健太郎	いわて県民情報交流セン ター アイーナ (岩手県)

### (3) スキルアップセミナー

当研究会では、2008 年から慢性 CNS としての実践能力の向上を目的に、スキルアップセミナーを企画、運営してきました。当初、会員がサブスペシャリティの慢性疾患患者に対するヘルスアセスメント技術を講義、ディスカッションするなど、会員同士が学び合う場としても活用されてきました。その後テーマは、日々の実践の中で課題になっていることが取り上げられ、そのテーマに造詣が深い講師に講義を依頼しています。

2013 年までは日本専門看護師協議会の協賛を得てセミナーを開催し、2014 年から 2016 年までは日本 CNS 学会交流集会として実施しました。その後は再び、日本専門看護師協議会から分野研修補助の支援を受け、セミナーを企画・運営していました。2025 年、専門看護師協議会が日本高度実践看護学会に改組されたことを受け、2025 年からは慢性 CNS 研究会単独主催でセミナーの企画・運営をしています。

年度	テーマ	講師	会場
2008	看護ヘルスアセスメント 講演 1「看護ケアとしてのフィジカルアセスメントとは？」 講演 2「生活を予測するためのフィジカルアセスメント -呼吸器疾患-」 講演 3「生活を予測するためのフィジカルアセスメント -循環器疾患-」	馬場 敦子 CNS (三菱重工(株)神戸造船所 三菱神戸病院) 竹川 幸恵 CNS (大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター) 仲村 直子 CNS (神戸市民医療センター中央市民病院)	新大阪丸ビル (大阪)
2009	看護ヘルスアセスメント 講演 1「高次機能障害患者の生活を予測するためのフィジカルアセスメント」 講演 2「慢性皮膚疾患患者のスキンケア ~裁量範囲拡大を考慮して~」	高山 望 CNS (北海道大学保健科学研究院) 藤原 由子 CNS (呼吸器・アレルギー医療センター)	キャンパスイノベーションセンター東京 (東京)

2010	糖尿病と向き合う人との新たなかわり 講演1「糖尿病看護を極める！インスリン療法と導入時の看護」 講演2「透析療法の看護を極める！治療に関わる意思決定支援」	横田 香世 CNS（関西電力病院） 鈴木 智津子 CNS（浜松医科大学医学部付属病院） 杉田 和代 CNS（聖マリアンナ医科大学病院）	京都テルサ（京都）
2011	うつをもちながら生きる慢性疾患患者へのセルフケア支援 講演1「慢性疾患とうつ ～原因・診断・治療～」 講演2「うつ病・うつ状態にある患者のセルフケア支援」 事例検討	渡邊 登先生（日本大学医学部精神医学分野研究所教授） 宇佐美 しおり先生（熊本大学大学院生命科学研究部 教授） 事例提供者:上原喜美子 CNS（新潟県立小出病院）	キャンパスイノベーションセンター東京（東京）
2012	看護ケアの質を向上させる組織変革 CNS 講演1「チェンジエージェントとしてのCNSの役割と活動の実際」 講演2「組織変革理論の看護管理における活用とCNSに望む役割」	添田 百合子 CNS（大阪医科大学付属病院） 小野 恵美子先生（大阪医科大学付属病院 副院長/看護部長）	堂島リバーフォーラム（大阪）
2013	慢性疾患患者の End of Life Care 講演1「非がん疾患の緩和ケアとは」 講演2「在宅非がん高齢者の終末期における意思決定支援 -実践報告-」	平原 佐斗司先生（東京ふれあい医療生協共同組合 副理事長） 藤田 愛 CNS（北須磨訪問看護リハビリセンター 所長）	新大阪丸ビル新館（大阪）
2014	第1回日本CNS学会スキルアップセミナー 専門看護師として成長するためのリフレクティブ・シンキング -臨床の場でいかに学ぶか-	東 めぐみ CNS（駿河台日本大学病院） 事例提供者：長谷 佳子 CNS（北海道医療大学看護福祉学部看護学科臨床看護学）	一橋大学橋講堂（東京）
2015	第2回日本CNS学会スキルアップセミナー コンサルテーションの効果 あなたはどのように示していますか？	下村 晃子 CNS（横浜市立脳卒中・神経脊椎センター） 馬場 敦子 CNS（神戸女子大学看護学部）	日本教育会館（東京）
2016	第3回日本CNS学会スキルアップセミナー 病棟に所属する認定間もない専門看護師が役割遂行する上での困難とその取り組み ～コンサルテーションの役割獲得に焦点を当てて～	山尾 美希 CNS（神戸市看護大学） 仲村 直子 CNS（神戸市立医療センター中央市民病院）	大田区産業プラザ Pio（東京）
2017	慢性の病いととも生きる人へのスピリチュアルケア	伊藤 高章先生（上智大学）	CIVI 研修センター 新大阪東（大阪）
2018	プロセス・コンサルテーションについて	高瀬 進先生（京都大学大学院）	大阪医科大学病院（大阪）
2019	改めて問う倫理調整とは何か	門岡 康弘先生（熊本大学）	大阪医科大学病院（大阪）
2022	慢性CNS研究会・日本専門看護師協議会共催セミナー 「交渉の考え方と技術」	福田 賢司先生（株式会社話し方研究所 代表取締役）	Web開催

2023	慢性 CNS 研究会・日本専門看護師協議会 共催セミナー 専門看護師のためのマネジメント 時代に 必要とされる「シェアド・リーダーシップ」 とは	斎藤 裕之先生（山口大学医学部附 属病院 総合診療部 准教授 臨床 教育センター 副センター長）	Web 開催
2024	慢性 CNS 研究会・日本専門看護師協議会 共催セミナー 専門看護師のためのマネジメント 「最新 のリーダーシップ研究による職場の活性 化」～リーダーシップ研究者が語るシェア ド・リーダーシップの効果と実現可能性～	石川 淳先生（立教大学経営学部／ 大学院経営学研究科 教授）	順天堂大学 7 号 館（A 棟）13 階 有山登メモリアル ホール（東京）
2025	専門看護師のための AI 活用術「対話型生 成 AI と看護—専門看護師の立場から AI の 活用について考える—」	平林慶史先生（有限会社ノトコー ド 代表取締役）	Web 開催

#### (4) 研究活動

慢性 CNS の高度実践の可視化のほか、活動の実際を明らかにするための研究活動を行ってきました。これまでの活動成果として、論文化および学会発表された研究は以下のとおりです。

##### 【研究論文】

柏崎純子，上原喜美子，片山将宏，嶋田幸子，園田由美，本城綾子，三好智佳子：慢性疾患看護専門看護師の活動の実態，日本慢性看護学会誌，第 17 巻，2023

片山将宏，本城綾子，三好智佳子，嶋田幸子，加澤佳奈，松本光寛，片岡千明：セルフケア行動に変化が起きる前段階の慢性疾患看護専門看護師のケアと慢性疾患患者の変化，日本慢性看護学会誌，第 19 巻，2025

##### 【学会発表】

加澤佳奈，橋野明香，米村朋代，石原未幸，西村はるよ，松元光寛，片岡千明：慢性期ケア領域における遠隔看護実践の変遷：スコーピングレビュー，第 19 回日本慢性看護学会学術集会，2025

戸沢智也，上原喜美子，東めぐみ，伊藤史，元木絵美，山尾美希：専門看護師教育課程を修了した人の更なる学習の必要性及び自己研鑽の実態調査—教育課程修了後から 3 年未満の方への調査から—，第 1 回 日本高度実践看護学会 学術集会，2025

片山将宏，本城綾子，三好智佳子，嶋田幸子，松本光寛，加澤佳奈，片岡千明：セルフケア行動に変化が起きる前段階の慢性 CNS の介入と慢性疾患患者の変化，第 17 回日本慢性看護学会学術集会，2023

柏崎純子, 片山将宏, 上原喜美子, 嶋田幸子, 菅谷千賀子, 園田由美, 本城綾子, 三好智佳子:慢性疾患看護専門看護師の活動の実態, 第 16 回日本慢性看護学会学術集会, 2022

丹生淳子, 松元智恵子, 鶴見恵子:慢性疾患看護 CNS による複雑なケア問題を有する患者への在宅療養移行支援一複数疾患をもち入退院を繰り返す高齢心不全患者の事例一, 第 5 回日本 CNS 看護学会学術集会, 2018

片岡優実, 丹生淳子, 岡佳子, 下村晃子, 鶴見恵子, 松本智恵子, 湯浅梨香:循環器・呼吸器疾患をサブスペシャリティとする慢性疾患看護専門看護師の実践の特徴, 第 11 回日本慢性看護学会学術集会, 2017

丹生淳子, 松本智恵子, 片岡優実, 高橋奈美, 下村晃子, 鶴澤久美子, 佐藤真理子:慢性疾患看護専門看護師の活動に関する文献検討, 第 9 回日本慢性看護学会学術集会, 2015

(5) ホームページ <https://reco-cc.jp>

2021 年から日本慢性看護学会のホームページに「CNS のひろば」というコンテンツが掲載され、慢性疾患看護専門看護師の活動が広報できるようになりました。これに続き、当研究会も、2024 年にホームページを開設しました。ホームページを開設した目的は大きく 2 つあります。ひとつは、研究会会員のよりどころの場となること、もうひとつは、研究会の活動を社会に向けて発信し、その役割を伝えることです。

ホームページ立ち上げの準備が始まったのは、2019 年 9 月の四役会、幹事会でした。その後、目的や費用についての検討を重ねました。当時の四役、幹事の方々の尽力により、2020 年 6 月の総会で、ホームページの開設が承認されました。

その後、広報活動委員を含むプロジェクトチームが発足し、コンテンツ構成やデザインの検討、予算との調整、運用規定の作成などを経てようやく、2024 年に開設に至りました。プロジェクトチームのメンバーは以下のとおりで、ホームページ開設後の運用は、広報活動委員会が担っています。

---

ホームページプロジェクトチーム (敬称略)

---

2021~2022 年度

山本 弥生、戸沢 智也、永淵 美樹、藤井 利江、三橋 啓太

2023~2024 年度

永淵 美樹、西 依見子、田中 亜由美、藤井 純子、三橋 啓太、南里 穂

---

また、これと並行して 2024 年、会員管理システムが導入されました。会員管理システムへのアクセスは、ホームページからできる仕組みになっており、正会員は会員情報をいつでも閲覧、更新できるようになりました。会員管理システムを導入したことによって、2 年に 1 回の幹事選挙がオンラインで投票できるようになりました。

## (6) その他

### 日本慢性看護学会 連載企画

慢性看護学会編集委員会には慢性 CNS（長谷 佳子さん、下村 晃子さん）が委員として関わっており、研究会の協力を得ながら連載企画がスタートしました。2013～2017 年には「慢性看護のエビデンス」、2018～2020 年には「卓越した慢性看護の実践を支える仕組みづくり」を連載しました。

### 慢性看護実践のエビデンス

長谷 佳子：慢性看護実践のエビデンス(第 1 回)慢性呼吸不全患者の看護に関するエビデンス，日本慢性看護学会誌, 7(1), 30-33, 2013

藤原 由子：慢性看護実践のエビデンス(第 2 回-1)喘息患者の療養支援に関するエビデンス，日本慢性看護学会誌, 7(2), 70-74, 2013

米田 昭子：慢性看護実践のエビデンス(第 2 回-2) 糖尿病看護における慢性性 高血糖による身体変化への対処とその支援，日本慢性看護学会誌, 7(2), 75-79, 2013

伊波 早苗：慢性看護実践のエビデンス(第 3 回-1)糖尿病看護における慢性性：血糖コントロールを目指す療養と生活との折り合いへの支援，日本慢性看護学会誌, 8(1), 32-36, 2014

東 めぐみ：慢性看護実践のエビデンス(第 3 回-2)糖尿病を持ちながら生きることを積み重ねることへの支援：糖尿病患者への学習支援と看護師の省察的実践，日本慢性看護学会誌, 8(1), 37-41, 2014

下村 晃子：慢性看護実践のエビデンス(第 4 回-1)脳血管疾患患者の看護に関するエビデンス：高次脳機能障害患者の社会的行動障害に対する看護ケア，日本慢性看護学会誌, 8(2), 66-70, 2014

和田 由樹：慢性看護実践のエビデンス(第 5 回)慢性心不全患者のセルフマネジメントを促進する看護に関するエビデンス，日本慢性看護学会誌, 9(1), 35-41, 2015

小江 奈美子：慢性看護実践のエビデンス(第 6 回-1)エビデンスに基づいた糖尿病腎症をもつ人への看護実践，日本慢性看護学会誌, 9(2), 94-96, 2015

片岡 優実：慢性看護実践のエビデンス(第 6 回-2)クローン病患者の看護に関するエビデンス：治療法の変遷に伴うセルフマネジメント支援について，日本慢性看護学会誌, 9(2), 97-102, 2015

菟下 八重：慢性看護実践のエビデンス(第7回)慢性肝炎/肝硬変患者の看護に関するエビデンス, 日本慢性看護学会誌, 10(1), 31-38, 2016

高橋 奈美：慢性看護実践のエビデンス(第8回)筋萎縮性側索硬化症患者の看護に関するエビデンス：ALSとともに生きる患者とその家族への支援, 日本慢性看護学会誌, 11(1), 40-45, 2017

元木 絵美：慢性看護のエビデンス(第9回)リウマチ膠原病患者の看護に関するエビデンス 薬物治療をうける関節リウマチ患者への支援, 日本慢性看護学会誌, 11(2), 99-104, 2017

### **卓越した慢性看護の実践を支える仕組みづくり**

戸沢 智也：卓越した慢性看護の実践を支える仕組みづくり 大学病院の外来における慢性病看護を活性化させる取り組み：心不全ケアの深化とその体制づくり, 日本慢性看護学会誌, 12(1), 39-45, 2018

中尾 友美, 武石千鶴子：卓越した慢性看護の実践を支える仕組みづくり 外来糖尿病患者に対するセルフケア能力尺度を活用した支援システム, 日本慢性看護学会誌, 12(2), 94-102, 2018

本城 綾子：卓越した慢性看護の実践を支える仕組みづくり 外来吸入指導システムの構築, 日本慢性看護学会誌, 13(1), 34-41, 2019

西 依見子：卓越した慢性看護の実践を支える仕組みづくり 摂食嚥下障害看護におけるコンサルタントナースの支援システム, 1 日本慢性看護学会誌, 13(2), 145-151, 2019

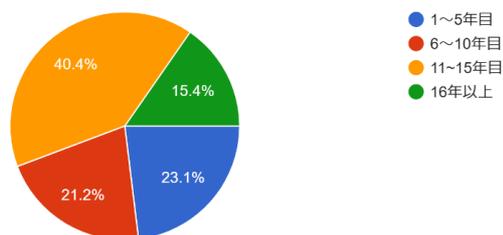
下村 晃子：卓越した慢性看護の実践を支える仕組みづくり 脳神経系疾患専門病院における看護外来の構築と10年の軌跡, 日本慢性看護学会誌, 14(1)9-14, 2020

藤井 利江：卓越した慢性看護の実践を支える仕組みづくり 多職種心不全チームの発足と介入の実際, 日本慢性看護学会誌, 14(2), 69-76, 2020

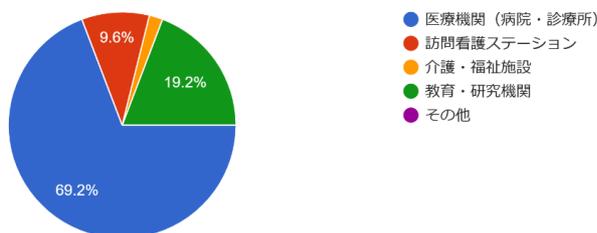
## 4. 20周年記念事業 参加者アンケートの結果

今回のアンケート（回答者 52 名）によると、記念事業への参加者は入会 11～15 年目の会員が約 4 割を占め、その他の層（1～5 年目、6～10 年目、16 年以上）はそれぞれ約 2 割ずつでした。参加者の所属は病院や診療所などの医療機関が約 7 割と多数を占め、次いで教育・研究機関、訪問看護ステーションが続きました。開催場所や開催時期については 9 割以上の回答者が「適切」と評価されていました。

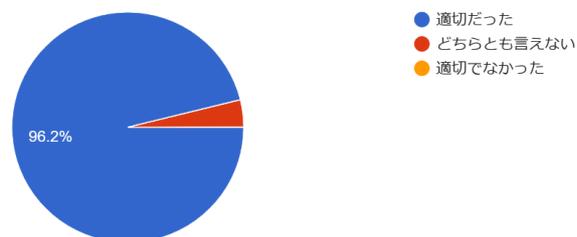
質問1 質問1につきましては、慢性疾患看護専門...研究会に入会されて何年目になりますでしょうか。  
52 件の回答



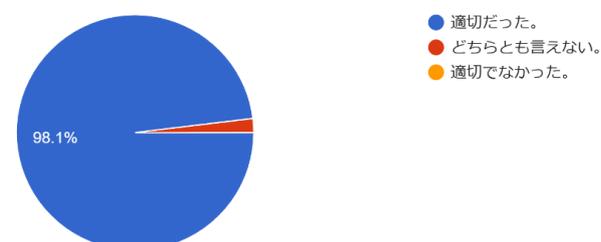
質問2 現在のご所属を教えてください  
52 件の回答



質問3 開催場所の適切性についてお聞かせください。  
52 件の回答



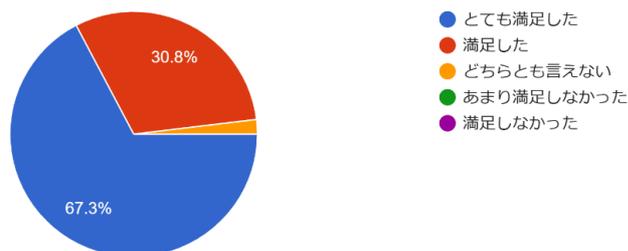
質問5 開催時期の適切性についてお聞かせください。  
52 件の回答



基調講演につきましては9割以上の方から「とても満足」「満足」とお答えいただき、歴代の先生方や修了生の活躍、研究会の歴史や役割について貴重な話を聞いたことに対する喜びや感謝の声が多く見られました。先生方の写真やメッセージに懐かしさや励ましを感じた方もおり、教育者側からの活動報告やグローバルな実践、慢性疾患看護専門看護師（CNS）の歩みなどの話が、参加者の今後の活動へのモチベーションとなったという意見が寄せられていました。

質問7 プログラムについてお尋ねします。「基調講演」の満足度について教えてください。

52件の回答



質問8 質問7の選択肢の理由や基調講演についてのご意見、ご感想をお聞かせください。

25件の回答

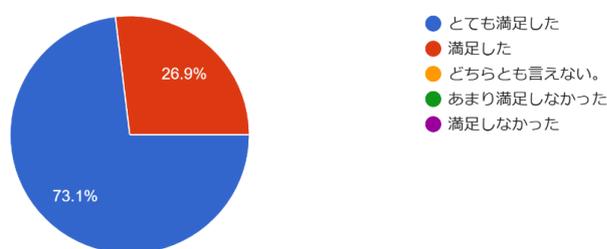
- 貴重なお話が聞いてとても良かったです。
- 野並先生の修了生の活躍の場について、研究会に込められた思いを知れてよかったです
- 野並先生や河口先生の写真を見せてもらえて懐かしかったです。
- 歴史や期待される役割や活躍が聴けた。
- ありがたいお話にエネルギーをいただきました。ひとつひとつ積み重ねていけるよう患者さんの力になれるように努力してまいります。
- 教育課程の先生がCNSの活動を報告されたものを聞く機会があまりなかったので、教育者側からの視点でcanの活動を考える機会になった
- 野川先生からの優しくも強いメッセージをいただいたと思い聴かせていただきました。
- 野川先生の貴重なお話や、CNSとしてグローバルに活躍されている方々の実践についてお聞きすることで、明日からの自分の実践へのモチベーションになりました。
- 大変貴重なお話を聞くことができました。今後の活力となりました。
- 慢性疾患看護専門看護師の歩み、チェンジエージェント、CNSの活躍を聞くことができ、今後の活動へのモチベーションにつながりました。
- あらためて、CNSの役割を考える機会となりました。
- CNSの教育についてやささまざまな活躍をきけてよかったです
- 野川先生の貴重なお話を聞いて良かったです。
- これまでの歴史をわかりやすくまとめて発表されており、それぞれの時期の課題を丁寧に積み重ねて今に至っていることに感謝いたします
- 先生の学生さんの可能性を信じるという言葉が心にささった。
- 野川先生のお話を聴かせていただける大事な機会となりました。ありがとうございました
- 野川先生のお話はとても楽しく、ユーモアで、拝聴していて慢性の歴史を感じることができました。
- もっとCNS教育でのご苦労や喜び、思い描くCNS像について語っていただきたかったです。
- チェンジエージェントの活動にとっても刺激を受けました。
- 自分の課題がたくさん見つかりました
- 様々なCNSの活動を知ることができました。
- チェンジエージェント力が6つの役割に追加して必要な能力っていうところが、ちゃんとしないとイケないと身の引き締まる思いがしました。

- チェンジエージェントについて学び、今後に活かしたいと思いました
- 研究会の成り立ちを知る事は、どんな思いでどんな風に育てて来たのか、その思いを知る事は、会に参加する意義や向き合い方に影響するとおもうので、後に研究会に参加する人にとって大切だと改めて感じた。
- 慢性看護のあゆみとご苦労とともに先生方の熱い思いを感じ、感動いたしました。バトンを渡していく責任を感じました

歴代会長によるリレートークにつきましては、参加された皆様が満足されたとお答えをいただきました。歴代会長がそれぞれの時代の課題に取り組み、研究会を導いてきた苦労や思いが伝わった。研究会の変遷や困難を乗り越えてきた経緯に感銘を受け、勇気づけられた。課題に沿った方針決定の重要性や組織化の努力を再認識し、先輩方の築いた歴史や看護への深い思いに学びを得たという、多くの感想をいただきました。

質問9 プログラムについてお尋ねします。「リレートーク」の満足度について教えてください。

52件の回答



質問 10 質問 9 の選択肢の理由やリレートークについてのご意見、ご感想をお聞かせください。

27 件の回答

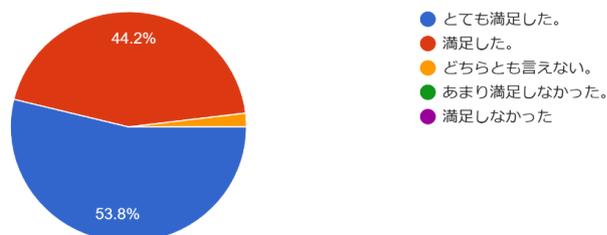
- すごく贅沢な時間でした
- 会長さん方が、とても苦労されて、維持発展してくださったことを、とても感謝しました。
- 組織化など学ぶこと、研究会の役割が学べました。
- 先輩方の苦悩と活動をお聞きして今日まで続いてきた研究会の歴史の一端を知る機会となりました。感謝と敬意の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。
- 時代とともに課題をクリアして発展してきたのだと改めて感じた。このような背景や思いを若い、経験年数の浅い can にしてもらうことが、研究会の継続にも役立つと感じた
- 研究会の立ち上げから、これまでの歩みなどの貴重なお話をたくさん聞くことができました。
- 研究会の歴代の会長からのお話をお聞きしながら、自分自身の研究会での活動の振り返りもさせて頂く機会となりました。とても感慨深いものがありました。
- 歴史が理解でき、大変貴重な会であることを改めて認識した。
- 研究会の歴史、歩みを知ることができよかったです。
- 記憶がよみがえり、初心を思い出しました。
- 研究会の歴史や各世代の会長の方々の思いが伺えたのはとても良い機会でした ありがとうございます
- 歴代の会長さん達の苦労が知れてよかったです。
- これまでの会の歩みが聞けて良かった
- 歴代の会長さん、ありがとうございます。
- これまでの会長の大変さや研究会への思いがよくわかりました。これからも長く研究会が続くよう尽力したいと思います。
- 歴代の会長さん達がどのようにどの時期の課題を考えて研究会を引っ張ってこられたのか、その苦労などがよくわかって、この研究会への愛着がわいた。

- 会の変遷や、活動以外にもにも困難なこと、大変だったことを乗り越えた経緯がとても興味深く聴かせていただきました。
- 歴代会長の研究会や CNS への思いが伝わって、頑張ろうという勇気に繋がりました
- これまで会を発展、維持してきてくださった先輩方に感謝するとともに、とても勇気づけられました。
- 課題の明確化と課題に沿った方針の決定の重要性を再認識しました。チームを維持、発展させて行くことにはとてもパワーが必要で、そのパワーをどうキープするかが私の大きな課題だと思いました。
- 研究会の歴史を知ることができました。
- 研究会の変遷を伺いながら、自分の活動の変遷も振り返ることができました。
- 組織化の努力がここにつながっていることがわかりました
- これまでの先輩達が築きあげてきた歴史を初めて知ることができました とても学びになりました 今後に活かしたいと思いました
- システム作りへの学びになった
- 打ち合わせ無しで、リレートークが繋がっていて納得感が得られた。
- 会長の皆様の深い看護への思いを知ることができ、感動いたしました

交流集会につきましては、9割以上の方々がとても満足、満足されたという回答をいただきました。参加者は研究会について振り返る良い機会となったこと、自由な意見交換や対面での交流が有意義だったこと、入会したばかりの方も先輩方とつながりが持つことができた、様々な視点を知ることができたことに満足していました。活発なディスカッションや地域での活動、継続的な努力に刺激を受けたという声もありました。また、運営への感謝や、先輩からのアドバイスが得られたことへの喜びも述べられていました。

質問11 プログラムについてお尋ねします。「交流集会」の満足度について教えてください。

52件の回答



質問12 質問11の選択肢の理由や交流集会についてのご意見、ご感想をお聞かせください。

21件の回答

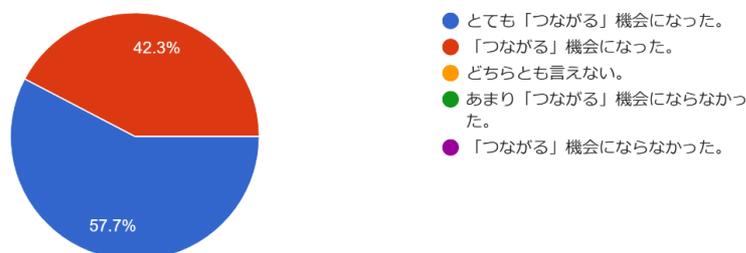
- 研究会について振り返ることができた
- 自由に語り合う場が年に一度でもあって、対面の研究会があるといいなと思います。サブスペシャリティごとの研究グループができたらいいなと思います。
- 入会したばかりなのでつながりができ、先輩方の話がきくことができて大変有意義な時間でした。
- 相談機会となったり先輩方のお考えを伺い知る貴重な機会で大変ありがたかったです。
- 顔見知りの方はもちろん、はじめての方でもすぐに打ち解けて活発なディスカッションができたこと、共感できたことにとっても満足しました。そして、それができるのはやはり研究会ならではの、と改めて思いました。

- 様々な視点からのご意見を伺えて良かったです。視野も広がりました。
- 地域での活動、ディスカッションなどに学びがありました。
- 継続してがんばられていることが、刺激になりました。
- 対面で話ができ、先輩方とお話する機会ができてよかったです
- ざっくばらんにお話出来て楽しかった
- 様々な場所で苦労されながらも患者さんにかかわられている CNS の話を聞き、頑張りたいと思いました。
- 担当させていただきありがとうございました
- 仲間づくりっていいなあと改めて思いました。九州の会が羨ましかったです。
- CNS ならではの視点からのディスカッションができました。この会でなくてはできなかった内容だったと思います。
- ディスカッションを通して「つながる」とはどういうことかを実感できました。
- 九州の取り組みも参考になりました
- グループに入っていた先輩 CNS の考え方を聞き、価値観の違いに触れることができ、自分の考え方に活かしたいと感じました
- 先輩のアドバイスをいただけたので
- VUCA の時代において、専門家がつながることの意義が実感出来た。
- ご準備とテーマの提供をありがとうございます

参加された皆様から、今回の 20 周年記念の場が「つながる」機会となったとお答えいただきました。懐かしい方々と再会できたことや、歴代会長の話をお聴きすることが有意義だったこと、また、振り返りや交流の機会となり、貴重な時間を共有できたことへの満足感も示されていました。

質問13 20周年記念の場は、皆様にとって「つながる」機会になりましたでしょうか。

52 件の回答



質問 14 20 周年記念についてのご意見、ご感想などがございましたら、お聞かせください。

22 件の回答

- 準備等、色々ありがとうございました。
- 懐かしい顔に会えて楽しかった
- 歴代会長のお話を聴く貴重な会となり、有意義な会でした。ありがとうございました。
- 企画運営して下さりありがとうございました。振り返り前に進む機会になりました。
- 企画、運営、会場準備など大変お世話になりました。貴重な時間を共有させていただきありがとうございました。
- このような会を開催いただきありがとうございました。
- 企画から開催まで、時間をかけてご準備頂きありがとうございました。研究会を作り上げてこられた先人の皆様と共に振り返らせて頂けたことはとても感慨深いものでした。また、この機会にお会いしたい方々とお話でき、有意義な時間にもなりました。参加して良かったです。本当にありがとうございました！
- 大変よい機会となりました。有難うございました。

20周年記念事業の企画・運営にご協力いただきました皆さんに心より感謝します。

第5代 慢性疾患看護専門看護師研究会会長 東 めぐみ

第6代 慢性疾患看護専門看護師研究会会長 米田 昭子

企画委員：東 めぐみ、伊藤 史、上原 喜美子、戸沢 智也、宗村 文江、元木 絵美、  
山尾 美希、渡辺 美和

記念品企画：井上 智恵、日赤看護大学修了者有志、東 めぐみ

実行委員：柏崎 純子、畑 和枝

会場手配：鶴澤 久美子

慢性疾患看護専門看護師研究会 20周年記念誌

発行日：2025年12月

編集：元木 絵美、上原 喜美子、山尾 美希